
DLO

ロボレンジャイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D L O

【Nコード】

N 7 6 0 5 R

【作者名】

ロボレンジャイ

【あらすじ】

ルイズは、進級できない自分を許してほしいと、詫びの手紙を認め、姉を癒す魔法の品と使い魔を求めて、自ら召喚の門へ……。

たどり着いた場所は惑星エベロン。

ゼロの使い魔とD & a m p ; Dオンラインのクロスオーバーです。

ロバ・アル・カリイエ学概論

……その年のトリステイン魔法学院の新生は幸運であった。と、後々まで伝えられている。

入学式の一週間前に、ある女性が特別講師として講義を担当することが決定されたからだ。

その女性の名前は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ドラ・ヴァリエールという。

その名前を知らぬ者は、もはやトリステインには存在しない。のみならず、ハルケギニアには存在しないのではないか？ もし、居たとしたらそれは赤子だけだろう……。

彼女はそう言われる程に、市井の端々で語られたのだった。

薔薇の如き華やかな美貌を持ち、類稀なる叡智で、ネフテスを飛び越え、ロバ・アル・カリイエの魔法を修得した偉大なる冒険家。孤独なアルビオン撤退戦、タルブ戦役での戦艦撃沈、トリステイン水精霊騎士隊と共に、ガリア王継戦役の最前線で戦い抜いた歴戦のアークメイジ……。

彼女が特別講師としてやって来る！

授業内容はロバ・アル・カリイエの魔法について！！

聴講を希望する書簡が、各国より連日津波の様に押し寄せた。

その選定と断りの書簡の往復、断りの書簡に抗議する書簡もまた押し寄せ、事務員だけでは到底足らず、教員全員が連日徹夜で、書類仕事をするという珍事も起きた。連日の疲労で倒れる教員、入学式の準備がろくにできない教員も現れ、結局の所、入学式当日になっても混乱は続いたのだった。

いや、混乱は現在進行形で続いている。諦めきれずに彼女の講義を、教室の外で聞きたいと聴講生は入学式にも押し寄せた。

肝心の講義は、入学式の翌日だったにもかかわらず。

十

新人生達は皆、英雄とまみえる為か、緊張しつつ自分の席についている。新人生でお喋りに興じている者など一人もいない。教室後部に座している聴講生のほとんどは、各国の魔法学院から送り込まれた優秀な研究生、ないし、教官達だ。中には、王継戦役で彼女の魔法を直接見たという者すらいた。そうした人達は彼女の魔法について解っている事柄をまわりの人達に話し、系統魔法との差異とロバ・アル・カリイエ魔法と絡めた新たな魔法の発展性等について述べている。中には喧々諤々の議論に発展するグループもいて、中々に騒々しい。

5分……、

10分……が過ぎた。

すでに授業は始まっている時間だが、彼女は現れない。

いくらなんでも初回から遅刻とは英雄と言えどもあんまりなのではないか？

皆がそう思い始めた頃、唐突に黒板の中央部が、光を帯び始めた。何事かと皆が注視する中、光は、一人が通り抜けるほどに上下に伸び、やがて長方形の扉へと変じた。

「御免なさい。遅れました」

その光るドアから青いローブを纏ったルイズが出てきた。

教室中からどよめきの声が響き渡る。

なんて魔法……こんな魔法見たことない！

教室の一番前に座っていた生徒は、ルイズの纏っているローブを見て、再度息を飲んだ。

ドラゴンの鱗が余す所なく縫い付けられ、かつ、膨大な魔力が込められている。それがどんな力を持っているのか想像すらできない、まさに英雄の名に相応しい一品だ！

それだけではない。右手の薬指につけている赤いルビーの指輪も

強力な魔力を纏っているのがわかる。一体どんな謂れを持つ品なのだろう……？

ルイズは後ろ手に魔法のドアを消し、教室をひと通り眺めると、パンパンと手を叩いて、皆の注意をひきつけた。

「はい、授業を始めます。まずは地理について」

十

ルイズは黒板に簡単なハルケギニアの地図を描き、その右側にネ^{エル}フの支配領域^フと綴った。
フテスと綴った。

彼女の板書はさらに続く。

「ロバ・アル・カリイエというのは、我々ハルケギニアに住む住人の呼び名であり、あくまで大雑把なものです。彼らは世界全体をエベロンと呼び、自らが住んでいる大陸をコーヴェアと呼んでいます」

黒板には、ハルケギニアの誰も知ることのなかった、地図の右側が描かれた。

「コーヴェアの南にはサンダー海を挟んで、ゼンドリック大陸、コーヴェアの南東にはエアレナル諸島、アルゴネッセン大陸。コーヴェアの遙か東側にはサーロナ大陸」

と、地図をどんどん書き足していく。生徒たちは皆、慌ててノートに地図を書き始めた。聴講生も同様である。むしろ、聴講生達の

目は血走っており、ルイズの一言一句を逃すものと気迫がこもっていた。

「私が主に活動しているのは南方のゼンドリック大陸ですね。冒険に纏わるエピソードは山程ありますが、それは別の機会にとっておきましょう。まずはコーヴェアの地理から」

ルイズは、大半の生徒が筆記するのをやめ、こちらを注目するまで静かに待ってから続けた。

「コーヴェア大陸には16の国と領域があり、エルフの支配領域ネフテスを抜けると北から南へ縦に4つの領域があります」

西北から順に魔の荒地、エルデン・リーチ、シャドウ・マーチ、ドロアームと書き込んでゆく。

「エルデンリーチは人間とエルフ、及びハーフエルフが住んでいます。シャドウ・マーチはオークと人間、及びハーフ・オークが住んでいます」

平然と解説したルイズだったが、場は一気に騒然とした。

始祖ブリミルの時代から連綿と続く仇敵、エルフだけでも腸が煮えくり返るのに、敵と通じあつまさえ子を成した者達がいるとは…それだけではなく、汚らしいオーク鬼とさえも！

「はい、静かに。そして全員起立！」

ルイズは号令をかけた。その場の全員が黙りつつ、あわてて起立する

「この様な者たちと戦い続けた始祖ブリミルの苦難に思いを馳せなさい。始祖ブリミル万歳」

万歳！ と、教室にいる全員が唱和すると「着席」とルイズは再度号令した。

ルイズの内心は複雑だった。

彼女の友人、ティファニアはハーフエルフである。だがいまだにそれは秘されていた。

ティファニアを守るためにも、己の保身の為にも100パーセントの真実を述べるわけにはいかなかった。

ルイズがエベロンで最も世話になったエルフは、かつて彼女にこう言ったことがある。

「嘘と真実を半分ずつ混ぜるんだ。そうすれば本当に秘したい事が守れる」と。

本当はエルフだけじゃなくオークとだって仲良くなれるんだよと叫びたかった。

彼女が冒険者として活動しているゼンドリックにはエルフの友人もいればハーフ・オークの師匠だっている。様々な種族の人が暮らしているのだ。そりゃ、最初はおっかなびっくりどころか、涙目で震えつつ杖を突きつけた。でも、互いに背中を預け合い、時には敵対して、理解を深めていったのだ。

自分の種族ではなく生まれ育った国に忠誠を誓い、祖国の発展に
尽くすエベロン人と、坊主憎けりや袈裟まで十把一絡に憎いと嘯く
ハルケギニア人。どちらの文明が発展し、より豊かさを享受できる
かは、明らかだった。

自分は目の前にいるこの人達の精神を改革しなければならない、
と、改めてルイズは思った。

エベロンの魔法技術だけではない、文明や文化、ありとあらゆる
物を取り入れて祖国の為に尽くすのだ。年をとった大人は駄目かも
しれない。だが、年下の若い世代に、新しい物を恐れず取り入れる
勇気の芽を芽吹かせよう。まるでゲルマニアじゃないかと罵られて
も構わない。

アンリエッタ女王陛下の御代をより磐石にするために、若い世代
を育てなければいけない。

ルイズは祈るように、心の中で、固く誓った。

「はい、授業を続けます」

十

夏期休暇を目前にしたウルの日、ティワズの週である。

ルイズの授業は初回から好評で迎えられた。授業は1コマ90分
で行われている。最初の30分は黒板に向かい、次の30分は実技

をやらせた。残りの30分は復習や質疑応答である。

ルイズの授業は実に巧みに行われている。生徒がダレてくれば雑談を始めた。雑談といっても、内容は多岐に渡る。概して男子生徒がダレてくれば戦の話をすることになる。生徒の中には次男、三男もいるから、軍人を志すものが多く、戦場での心得は少なからず彼らの為になった。女子生徒がダレていれば、ストームリーチやシャーンで流行しているファッションやお菓子の話になる。

もちろん話すだけではなく、実際に振舞ったこともある。ある女生徒にうつかり、テレキネシスの魔法が込められたビホルダー・クツキーを食べさせてしまい、窓枠ごとぶち破って空の彼方へ飛ばしてしまったこともあるが。

ちなみに件の彼女は、マリコルヌの末の妹で、それ以来、「お姉さま!」と何故か懐かれた。兄と同じく、愛嬌のあるぼっちゃりさんで、もちろん、紛うこと無き……いや、彼女の名譽の為にも秘しておくべきだろう。

「じゃあ夏期休暇の宿題を出すわよ。女子は眠りの呪文に使う、薔薇の花を育ててね。どんな薔薇がより質のよい物質要素になるかレポートにまとめて。男子は蜘蛛。どんな種類の蜘蛛が良い糸を出するかレポートにまとめなさい」

男子生徒からのうげーという萎びた声と、はいと元氣の良い女生徒の声が実に対象的だ。

「本格的なウィザードに成りたければどっちもやるべきなんだけだね」

ルイズは腰のポーチから魔法の粘土を取り出し、手でこね回しながら生徒たちに宿題を伝えた。

聴講生に関しては、宿題はない。彼らはルイズとの質疑応答を何よりも大事にしているし、長年の経験と知識から勘所を抑え、新生よりも一足飛びにより高度な秘技をルイズから学んでいた。

彼らはルイズが『教えても良い』と思った技術のみを伝えている事を薄々と感じている。

ルイズは、トリステインの決戦兵器と呼んでも大げさではない存在だ。

その彼女が簡単に教えるものに、軍事、及び、魔法技術のプレイクスルーとなる様な、重要なものが含まれているわけがない。

だが、技術は日進月歩である。何が飛び出してくるかわからない。そういったわけで、彼ら聴講生はスパイとして、祖国に細かく報告しているのだった。

ルイズは彼らとの、まるでドラゴンとエルフの化かし合いを半ば楽しんでやっている。

最初の授業でグレイター・レポート転移という大技を見せてしまったが、これは問題ない。女王陛下から「どんどん、見せつけておやりなさい」とお墨付きをもらっているし、必要な物質要素もその材料は粘土というだけで、こういう素材で作られた粘土なのか不明だからだ。

「ルイズ先生、夏期休暇はゼンドリックへ行くのですか？」

と、女生徒が尋ねた。

「……そうね。一度実家にかえって、それから、モルグレイヴ大学にも顔を出さなきゃ。カラトリックス教授と共同で改造してる探査船の進捗率も一度見ておかないといけないし……」

「えー、ルイズ先生を領地に呼びたかったのにー」と、声があがると、私もーと別の生徒が声を上げ、別の生徒は「ボクは先生についていきたいです！」と騒ぎ始めた。

「ダメダメ。向こうは危険よ。私の位階でもヒヤリとすること山ほどあるんだから。それに海千山千のエルフや韻竜、巨人族相手にビビる事無く交渉できる自信ある？」

と、あえて平民のスラング「ビビる」という言葉を使って坊ちゃん、嬢ちゃん達を”威圧”する。エルフ、韻竜、巨人と聞いた生徒たちはあうあう……と、言葉を失った。

「おみやげは買ってくるから、ニイドの月にまた会いましょう。じやあみんな宿題を忘れることなく、元気に会えることを祈っているわ」

ルイズは、誰にも聞こえないように、呪文をとこなえながら、捏ねていた粘土を壁に叩きつけた。その瞬間、粘土は自ら光を発してドアを形作る。

「みんな、またね」

自室に帰ってきたルイズは、魔法のドアを閉じた。部屋の中はゼンドリックに戻るための準備で、才人曰く「ゴミ女の部屋」の様相を呈している。本来ならば、ヴァリエール家のメイド達が片付けていそうなものだが、ルイズの部屋は、魔女のそれだ。迂闊に触ると危険な代物があるので、片付けるのにウィザードとしての専門知識が必要になるのである。

故に、彼女の部屋は、ルイズ自身が片付けねばなくなり、今まで自分で物を片付けたことのないルイズは、どうしていいかわからず、適当に片付ける事になり、やがては面倒臭くなり……

「ご覧の有様だよ！」

と、犬、もとい、使い魔に貶されるはめになるのだった。

「サイト……」

ルイズは、自分を貶したサイトの声を思い出していた。もう長い間、彼の柔らかい声を聞いていない。連理の枝、比翼の鳥になったかもしれない使い魔の少年は、この場にはいなかった。

少なくともこの次元には存在しない。

（サイト……、必ず、貴方にもう一度会いに行くわ）

ルイズは、壁に掛けてあるコルクボードの、ストームリーチ・クロニクル誌の切り抜き記事を手にとった。

そこには、こう書かれていた。

『ハウス・チュラーニ所属、新進気鋭のアイドル・プロデューサー、
サイト・ヒラガ氏、
ストームリーチ防衛戦にて行方不明』

召喚の門を越えて

涙が止まらなかった。

どうして自分には魔法が使えないのか。

姉や母の厳しい手ほどきを受け、呪文は完璧に覚えている。発音や抑揚も、杖を振り方も完璧にできている。なのに呪文は発動しなかった。

毎日、杖を振って、精神力の続く限り呪文を唱えた。

それでも呪文は発動しない。発動するのは爆発だけだ。精神力を込めすぎたせいか、威力がありすぎて中庭が吹き飛んだ。

それ以後は、練兵場でひたすらに呪文を唱え続けた。

練兵場は連日の練習により、空軍の艦砲射撃の如き有様になった。草ひとつ残さず穴だらけにしても、結局、呪文は成功しなかった。

始祖ブリミルが、与えたもうた、最大の祝福が”魔法”である。

公爵家の三女として生まれた以上、公の場に出ることもある。そういった場で、魔法を使わないという選択肢は、まずない。心無い者は、母が平民の男と浮気したのではと邪推したという。

母が前マンティコア隊の隊長、かの烈風力リンだと知ったその男は、ある日を堺に、宮廷に参内することが、物理的に不可能になったと、後に聞いた。

情けなかった。

あまりに不甲斐ない自分が恥ずかしかった。

魔法学院に入れば、こんな自分でも、教授してくれる師がいるのではないか？

呪文の発音、抑揚、杖の身振りは完璧なのに、何故、爆発という結果になってしまうのか？

その積年の疑問に答えてくれる人は、入学して2年に仮進級した今でも、ついぞ現れることはなかった。

天には月が、自分の目の前には召喚の門が煌々ときらめいている。

+

ルイズは泣きながら、父母と二人の姉に詫びの手紙を認めていた。

初めて成功した魔法は、同時に失敗でもあった。使い魔が現れなかったのである。

授業はすでに終了し、担任のコルベールは学院長のオスマンと、自分の今後について話し合っている。公爵家の三女という身分故に退学は絶対がない。病気による休学とされ、家に押し込められるのだろうと想像がついた。

婚約者のワルド卿は、ずいぶん貧乏くじを引くことになりそうだ……。

彼は魔法も使えぬ女を妻として迎えねばならない。あるいは、婚約そのものが破棄されるかもしれない。いずれにしても、自分に待っているのはみじめな将来しかない。

嫌だ！

そんな未来は絶対に許容できない！！

……使い魔が現れないのは、恐らくは、自分のせいだろうから仕方ない。

先達の師が言うには、この召喚の門はハルケギニアの何処に繋がっているという。

ならば、こちらから使い魔を迎えに行つてやる。それこそ、首に縄をつけてでも。もし、門を抜けた先に何もいないのなら、せめて姉、カトレアの為に、何かしらの魔法の品、あるいは、体を癒す薬草なりとも持ち帰ろう。そして、改めて家族に、不出来な娘ですみませぬと頭を下げよう。

果てることなく落ちる涙で、うまく前が見えない。手紙に雫が落ちないようになにしながら、ただひたすらに侘びた。おそらく、親不孝な結果になるだろう。そもそも無事に生きて帰れるかすらわからない。これが、謝罪ではなく、ただの逃避ということも頭の芯から理解している。

それでも、今は家族に会いたくなかった。

ルイズは手紙を蠟で封し、自分の印章を付け、机に置いた。財布の中のエキュー金貨がいくらかあるのか確認し、懐にしまった。着替えもとりあえず2日分用意した。つい先程、メイドが夕食をこまで持ってきたので、スープだけ飲み、肉は細かく切ってからパンに挟んだ。それからパンをハンカチで包んでバスケットにいれる。食べる量を少なくすれば2日くらいなんとかなるだろう。

今、この場で召喚の呪文を唱えても使い魔は現れないだろう。そう判断し、杖を取り出して、召喚の呪文を唱えた。召喚の門は煌きながら出現した。魔法を使うことができた。それが少しだけ嬉しかったが、結果としてはやはり中途半端。

さあ、使い魔を迎えに行こう……。

ルイズは迷うことなく、召喚の門に入った。

門の内側は、相変わらず銀光に煌きながら、不思議な文様が絶えず蠢いていて、触ると不思議な手触りが感じられる。固いような、それでいて弾力があり、前後以外の場所へ行くことを拒絶していた。壁の手触りを楽しんでいたルイズは、ふいに風を感じて、はっと目を見張った。

何かが、居る。こっちへ来ようとしている……。

「あれ、何処だここ？」

その声を聞いて、ルイズはひどく驚いた。人間……？

さらに、その声が自分の左耳ではトリステイン語、右耳で聞いたことのない言語に聞こえた事に再度驚き、声をだしてしまった。知らない言語ということは、召喚の門は、ハルケギニアでない遠い場所に繋がってしまったのだ。もしかすると、エルフの支配領域すら超えた、東方に繋がったのかもしれない。もしも、この先にある場所が東方ならば言語が違っていてもおかしくはないのだ。

「誰かいるのか？ え、外国の人！？」

そう声を上げ、目の前に現れたのは、黒目黒髪の少年で、背囊を背負い、文字が刻まれた不思議な材質で出来ている白い袋を両手にぶら下げていた。その袋には一見したところ、見たことのない品物が詰め込まれている。その不思議な品物にも興味はあったが、ルイズは少年の顔をじつと観察した。彫りの浅い顔で全体的にのっぺりとした平面的な顔だ。鼻が低いのがそれに拍車をかけている。眉は濃ゆく意思の強さを感じさせるが、目は状況が理解出来ないせいか不安に揺れていた。

およそ、トリステインであまり見ることのない顔だ。

愛嬌のある顔ではあるが、少なくとも自分の好みではない。

ルイズは冷静に観察を続けた。

才人は、自分の身に降りかかった異常事態に、呆然としていた。

……これは、いわゆるファンタジーでいう処の召喚って奴だろうか。とりあえず自分はどうすればいいのでせうか？

語尾が時代錯誤だなと、冷静に錯乱していた。ただ、目の前の女の子の柔らかそうなピンク髪と泣きはらした目はひどく印象深い。

……なんで泣いてるのかわからないけど、力になってあげたい。

『門』の魔力が、浸透しはじている才人は、そう思った。

ルイズは次に、その少年の服装に注目した。柔らかそうで、青く染めた上着は見たことのない生地で出来ていて、そのデザインも、トリスタニアでは見たことのない物だった。彼の着ているズボンも、上着より深い藍で染められ、靴は革の代わりに、やはり自分の知らない材質で作られている。

仮に平民だとしても、それなりに裕福な平民、おそらく大商人の息子なのだろう。商人の息子であれば、貴族に対する礼儀も心得ているのが普通だ。山や森の中で彷徨う覚悟をしていただけに、少しだけほっとしたが、平民と言えど、家族がいるであろう人間を使い魔にするわけにはいかない。とりあえず彼の家に泊めてもらい、癒しの魔法に関する品や薬草について聞いてみよう。

ルイズはそう考えた。

「私は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエ

ール。貴方は？」

「俺、平賀才人……って何これ、なんで右が外国語で左が日本語なの！？」

「落ち着いて。ここは召喚の門の中よ。貴方、魔法を見たことないの？」

「魔法！？ やっぱりこれ、魔法なの？ アンタすげーな！」

魔法スゲー！とはしゃぐ少年を見て、ルイズは齒ぎしりしたくなる程の苛立ちを覚えた。こいつ頭悪い。親の金使って遊び呆けているバカ息子の類なのでは？ と、危惧の念が募っていく。

メイジの、貴族の女性にむかって、アンタ呼ばわりする礼儀知らずだ。街への道を聞いてさっさと別れたほうがいいかもしれない。

「……街への道を教えてくださいませんかしら？」

と、ルイズは、丁寧に聞いた。

だが、少年はこっちを無視して門の内側をスゲー、スゲーとべたべた触りまくっている。右耳に聞こえてくる未知の言語の煩わしさもあり、元々、気の短いルイズはついにキレた。

「人の話聞きなさいよ、このバカ！」

と、杖を抜いて、少年の足元を軽く弾けさせた。嫌になるほど練習したせいで、ある程度威力の加減と発動箇所の制御が出来る。

いきなり怒鳴りだした外国人の女の子（自称、魔法使い）が放った爆竹に才人は驚き、素直に「ごめん」と謝った。

「えつと、ごめんな。君、確か、ル、ル、……ルイルイだっけ？」
「失礼ね！ 貴族にそんな口の聞き方していいと思っっているの！
だいたい何よルイルイって！」

「幸福の使者だよ！」

親父の書斎にあつた本には、そう書いてあつたんだと、女の子の名前を覚えられなかった才人は言った。むろん姑息な嘘である。

「幸福の使者……か。ステキね。でも本人の許しなく、名前を短く呼ぶのは、相手を軽んじる行為に他ならないのよ。注意するべきね」

「うん、ごめんな」と、才人は、自分より身長の低いルイズの頭を撫でようとした。

ルイズは杖でその手を弾いた。

「女の子の髪に気安く触らないように。礼儀つて物をご両親に教わらなかったの？ ……それ以前に貴族に対しての礼儀が、まるでなっていないわ。そんないい身なりをしている癖に、こういう教育を受けてきたのよ？」

少年を非難しながら、ちよつとその生地をよく見せて、と、杖を油断無く右手に持ったまま、ルイズは左手で少年の着ている服の生地感触を確かめた。

「服？ シمامラで母ちゃんが買ってきた、イチキュッパのカジュアルだけど？」

casual

ルイズは、その単語をしかと耳にした。

「アンタ、今、アルビオン語を口にしたわね？ アルビオンと貿易している商人の息子なの？」

「アルビオンって何？ 知らないなあ。カジュアルって英語だぜ？」
「エイゴっていうのが、よくわからないけど、アルビオン語が使われてるならどうにかなるわ」

さ、街への道を教えて頂戴、と、ルイズは杖で少年の胸を軽く小突いた。

「はい、案内します……」

と、間髪入れずに答えてしまってから、「なんで年下の女の子に命令されてるんだろう……」とぼやき、自分の入ってきた『門』を振り返った。

その時だった。

先ほど、ルイズが放った魔法は、彼らの足元にひび割れを作っていた。それが割れてゆく卵のように、亀裂を増やしてゆくのを彼らは気付かなかった。ひび割れからは、青い海と白い雲、何より太陽の光が入り込み……

ルイズと才人は悲鳴をあげる間もなく、ひび割れから吸いだされ『空』へと落ちていった。

オージロスは、どんな種族にも慈悲深く、かつ、公正でありたい
と思っている白竜である。

アルゴネッセン大陸に引き籠もり、来る日も来る日も、『竜の預
言書』の解読に明け暮れている他の竜達の中には、下等種族を滅ぼ
してしまえと息巻く者も少なくない。評議会のなかでも有力議員で
ある、赤竜ヴェーラはその最右翼といえる。

彼女は、「ゼンドリック大陸を、下等種族ごと海に沈めてしまえ」
と主張する。

オージロスはその意見に賛同できない。彼は、人間を初めとする
下等種族は、竜族に比べて軟弱な体で、寿命も短く、頭も悪い。故
に、我ら竜族が導いてあげねばならないと考えていた。竜族以外の
種族からすれば、実にかから目線の傲慢な思想であつたが、いたつ
て本竜は大真面目である。

オージロスが、巨大な氷柱を飴玉替わりにペロペロしゃぶる様な、
まだ歳若い竜であつた頃、彼が寢床にしていた洞窟に侵入者が来た
ことがある。いわゆる、冒険者と呼ばれる山出しの輩だ。もちろん
狙いは財宝である。オージロスも、大方の竜がそうであるように、
竜の本能に従つて大変、光物が好きだつた。その財宝の山の上で、
鼻を鳴らして寝転んでいた。そして、ごろんと寝返りを打つた時に、
ぶちぶちぶちと、その巨体で冒険者達をうっかり潰してしまった
のだ。

彼は悔いた。泥棒はいけないことなんだと、理を尽くして諭して
あげるべきだつた。

かつて、あるファイアー・ジャイアントは泥棒にこう諭したという。

「我々は心優しい種族だ。だからファイアー・ジャイアントと呼ばれる。今からお前の頭を踏み潰すから、ちゃんと避けるんだぞ」と。

それなのに、自分は問答無用でつぶしてしまったのだ……。

「あの時は、3日も食事が喉を通らなかった上に便秘した。ミジンコにだって生きる権利はある。人間やエルフ達に龍紋ドラゴンマークが現れたように預言に関する印が将来、ミジンコに現れるかもしれない。もし、今、ゼンドリックを滅ぼして、解読に必要なマークの血統が途絶えちゃったらどうするの？」

と、反論し、周りの竜達から「こいつ何言ってるの?」といった顔をされたのは、つい先日のことである。

+

エベロン、東経158度12分、北緯6度58分。

コルスス島付近、高度1800メートル。

住み慣れた家を離れ、オージロスは、赤道至近の暑い地帯を飛んでいた。彼は本来、寒冷地域を住处とする竜である。そんな彼が熱帯に出張ってきたのは訳がある。彼の番竜であるオージルシークス

が『研究が捗らないから気分転換に散歩してくる』と言って出かけたまま、3ヶ月も戻らない。

さすがにちよつと遅くないか？

彼がそう考え出した頃、卵兄弟であるオージレダルが彼の家にやってきた。彼は評議会の議員になったばかりの駆け出しで、下っ端の雑用係としてゼンドリックとアルゴネッセンを行ったり来たりしている中々に忙しい竜だ。その忙しい彼がとんでもない報告を持ってきた。

オージルシークスがサンダー海で暴れて下等種族の皆さんがえらい目にあつてゐる、お前の嫁だろなんとかしろというのである。

オージロスは慌てて、ゼンドリックへ向かった。時折、休憩を挟みながらサンダー海へたどり着くと、オージルシークスがコルソス島へ近づく船を、片っ端からアイス・プレスで沈めてゆくではないか！

何やつてゐるんだと、止めようとして近づき、ふいに、彼女以外の魔力を感じ取った。

怪訝に思つたところへ、彼女から横殴りに殴られ、吹き飛ばされる。

オージルシークスの目には知性の光がない。それでも懸命に呼びかけ、落ち着かせようと近づくが、暴れに暴れて、手が付けられなく、空中で揉みあう内に翼の皮膜も一部破れてしまった。

このままでは自分が危ない。コルソス島で不時着し人間に姿を変

え、一時避難することも考えたが、仕事を持つ身である。あまり長い間、研究を止めるわけにもいかない。

オージロスは、襲いかかる妻を右に、左に避けながら、溺れる人間たちに浮輪がわりになりそうな物を与え、這々の体でアルゴネットセンへと帰還した。そして、我が家の雑事一切を取り仕切っている奉仕種族、すなわちコボルド達に妻を任せることにしたのである。

コボルドと聞けば、犬面で毛の長い種族と思い浮かべる人がいるかもしれない。だがそれは別の次元界の話であって、惑星エベロンのコボルドは、レプティリアン、すなわち爬虫類だ。

家宰を司っているコボルド、ディックは主の命を受け、12名のコボルド達を選抜し、武装を整えさせた。

翌日、疲れも癒えぬままオージロスは、コボルド達を背に乗せてサンダー海へ向かったのだった。

降下前に再度、コボルド達に装具を確認させようとした矢先、珍事が起こった。

自分達より上空から、二人の人間が悲鳴をあげつつ落ちてきたのである。下等種族の皆さんの中でも、まだ歳若い少女達だった。竜なら尻に卵の欠片がついているだろう。

オージロスは、フェザー・フォールの呪文を持続時間延長付きで、まず女の子にかけ、背に乗っているコボルド達に回収させた。逆に、男の子は「オレオワタアアアアアア」と、他次元でドップラー効果と呼ばれる音の波、いわゆる悲鳴を残しつつ、ものすごい

勢いでそのまま降下し遠ざかってゆく。距離延長、持続時間延長、と呪文修正しつつ、オージロスはフェザー・フォールを男の子にかけた。

暗算が正しいなら、浜辺に無事着陸する軌道に乗っているはずである。女の子はどうも気絶しているようだ。もうしばらくすれば、ディック達も降下する。下手に起こして、騒ぎになるのも問題だ。そのまま眠らせていたほうがいいだろ。

オージロスは高度を落とし、厚い雲の中へ突入した。

妻が天候制御の呪文で、南国の島を氷に閉ざされた島にしたせいで、皮肉にも雲の上より快適だった。自分にまとわりつく水の粒がひんやりとして気持ちがいい。

コルソス島が見えた。

妻はどこかで巣穴を作り、今は眠っているのだろう。雲下に妻の姿は見当たらない。ディック達を降下させ、自分が雲上に出るまでの時間はありそうだった。

「ディック」

「はい、閣下。装具確認！」

ディックが部下に命令した。部下達は自分の盾や得物の具合を確かめている。彼の視線は、縦列になった部下たちの最後尾に向けられていた。

「ドク、その人間のお嬢さんは大丈夫なんだな？」

「気絶してるだけです……どうして翼もないのに空を飛ばうと思

「つたんでしょっかね？」

ドクと呼ばれた、まだ若いフェーヴァード・ソウルは心底呆れた口調で、長の疑問に答えた。

「わからん。まあ、哺乳類自体が奇妙な生き物だからな。ジョー、ドクと一緒にお嬢さんを運べ。

人間の村があるそうだからな。そこで引きとってもらえ」

コボルド達は、人間の子供のように甲高く、しかし、爬虫類特有の囁いた声で、自分だけではなく、他の仲間の装具まで確認し、問題がなかったら肩を叩いて点呼して前を向いた。

「ディック、後はまかせる」

オージロスの深いバリトンの声には、彼らに対する篤い信頼がこもっている。

「はい、閣下。おまかせを。全員降下！」

その号令に、次々とコボルド達は「A u s s i r ! 」と自らの誇りを叫びつつ、コルソスの空を舞った。

浜辺にて

ジーツ・シミスは冒険とお宝と女をこなよく愛するローグである。

そんな彼が、最終戦争末期からつるんでいる仲間達、ウイザードのタルブロン・テウンとクレリックのセリマス・ヴィルンと共にコルソス島に来たのは、セリマスの父親が原因だった。

数年前、彼は娘可愛さのあまり、腕利きの冒険者だったジーツに護衛を依頼したのである。

ジーツはその依頼に面食らい、依頼人の正気を疑った。自分はローグだ。あくまで古代遺跡の罠を解除したりするのが仕事であって、護衛の仕事はファイター等の前衛に依頼するべきだと突っぱねた。

だが、依頼人は首を振り、どうしても受けてほしいと、話を続けた。

娘が冒険に出たがっている。1回行けば納得するだろうから、どこか適当なところに連れてってくれ。危険な罠でヒヤツとすれば、怖がって冒険になんか行かないと言い出すだろう……。

依頼人の庭先でちらりと見かけた、あの負けん気の強そうなお嬢さんが、そんな事でへこたれるか甚だ疑問であったが、テーブルに乗せられた金貨の輝きを見て、ジーツは依頼を了承した。

そして、自分がかつて冒険したことのある遺跡にいき、自分で罠を再設置して、セリマスの度肝を抜くような派手なドッキリに成功した。

だが、自作自演は完璧に過ぎた。

彼女はジーツの読み通り、負けん気を発揮し、むしろのめり込んでしまったのである。

以来、腐れ縁とはよくいったもので、その後、最終戦争でカルナス戦線を、駆けづり廻るはめになった。

敬虔な銀炎教徒であつたセリマスは、数々の戦闘で自分の実力を遺憾なく発揮して、頭角を表し、自分の部隊を預かるまでになった。そしてカルナス国のアンデッドによる特殊部隊と正面から殴り合い、ジーツは彼女の従者であつたタルブロンと共に、インレジミテ透明化の魔法で、敵陣に近づき、生きている高級将校を暗殺するという戦法で、セリマス部隊を補助し、おびただしい戦果を上げた。

無論、正々堂々を旨とするセリマスが、暗殺なんて手段を容認するわけがない。

ジーツのいい加減な報告に、彼女は苦虫を噛み潰した顔をしていたが、最終的には容認した。仲間との信頼関係に罅をいれたくなかつたのか、大事の前の小事と考え直したか、おそらくは両方であるう。

ジーツは従軍中も、彼女の父親から給料を支払われた。

彼は管区長であるから実入りがいいのは当然だった。

……やがて、戦争が終わりスローンホールド条約が結ばれた。

しばらくの間は戦後処理に忙しく、特に問題も起きなかったが、銀炎教会も一枚岩ではない。生臭い人間は山ほどいる。戦果をあげ、経験を積み、位階もあげたセリマスは、生まれ育った故郷スレイン国の首都フレイム・キープではちよつとした有名人だった。それを妬んだ者たちの手によって、生きている英雄はいらないとばかりにゼンドリック大陸は植民都市ストームリーチの一角にある、ソウルゲート砦に、体よく左遷されることになった。

そこは修行時代に、姉妹の契を交わした部屋子、マルガリータ・ドライデンとその父が治める場所である。セリマスは昔を懐かしみ、命令を左遷とは思わず、神託が下ったと、自分が倒すべき《悪》を求めてゼンドリックへ旅だったのだった。

もちろん、彼女のお守りであるジーツ達でもある。

幼少よりセリマスの従者であった、ウォー・フォーシド戦闘機械タルブロンは、従軍の経験により、幻術のアークメイジとなるほど成長した。またスローンホールド条約により、個としての自由と、主セリマスよりテウンの姓を戴き、気のおけない仲間となったジーツと共に、冒険者としての新たな人生を楽しむつもりだった。

かつてゼンドリックに栄えた巨人魔法文明の残滓が、ウィザードとしての自分を、より高い位階へ導いてくれるのではないか？

そうあれかしと、ゼンドリック行きに志願した。

ジーツはより単純だった。

まだ見たことのない世界、

まだ見たことのない大量の金銀財宝、

まだ触ったことのないお姉ちゃん達のおっぱい！

ついでに、うまい酒があればよかった。一度は故郷のタレント平原に顔を出す事も考えたが、同族の女たちはちっパイしかないから帰っても楽しくない、という結論に達し、ゼンドリック行きに了承した。

無論、いつもの月給に加えて、さらなる危険手当を当然のようにセリマスの父親に要求したのだった。

スレインからライトニングレールに乗り、一路ブレランド国へ。

コーヴェア大陸最大の都市シャーンから船に乗り、サンダー海を超え、中継地点コルソス島に降り立ったところで事件が起きた。

目撃者の話によれば、のんびりと空を飛んでいた白竜が、空中で雷に打たれたかのように身悶えした後、突然、海上の船を手当たり次第に攻撃し、尽くを海中に沈めた。その後、白竜は翼をふるって、空中に静止し、何がしかの呪文を唱えたという。

それからというもの、コルソス島の周辺海域は常に曇天に覆われ、

赤道至近であつたのに、雪が降り、南国の色彩あふれる植生は寒さによつて枯れ始め、付近の海上は氷に、空は白竜に閉ざされた。

時を同じくして、海中からは半魚人達サファゲンが、村を襲撃し始めた。

半月に一度、海中と地上の物産を物々交換するという、穏やかで良好な関係を築いていたにもかかわらず。

問答無用の襲撃だった。

どうにか撃退し、村の門にバリケードを築きあげ、いつでも襲撃に対応できるような警戒網を作り上げると、今度は、村人やコルソスに寄港している船員及び客まで行方不明になる事件が続発した。

不運な行方不明者達は、半魚人達に喰いつくされた動かぬ死体、あるいは、邪悪な儀式によつて生きる死体、すなわちゾンビとして、門の外を彷徨している所を発見された。

運良く生きて発見された場合、海神を讃えよと洗脳ディヴァウラーされていて、帰依を拒否すると襲いかかる有様だった。

門のバリケードはより強固になり、門を出ることは、有力な冒険者以外は禁じられた。

セリマスは連日、門を抜け、海神を祀る祭壇を見つけては破壊し、ジーツは暇さえあれば、浜辺に到着する品物を懷に収めたり、死体を丁寧に葬ったり、生存者であれば、村まで届ける事になっていた。

これが、この3ヶ月の顛末だった。様々な物事に楽しみを見出す

ジーツも、この状況には流石にうんざりしている。

そんな矢先の事である。

目のいいジーツは、浜辺に倒れている身なりの良い少年を見つけた。

こりや運が向いてきたぞ。遺品を届けりゃ金になる。生きて親元に届けりゃもつと金になる。

ジーツは踊りだしたい気分少年の元へ向かった。

+

潮騒が聞こえる。

寄せては帰り、帰っては寄せ、静かになり、時には轟音となり、幾許か逡巡した後、ああ、波の音だったのかと、才人はぼんやりと考えた。

才人は浜辺でうつ伏せに倒れていた。

口の中にまで砂が入り込み、ジーンズは波をかぶり、冷たく、重い。

そつだ！ ノートPC！

せつかく修理から帰ってきたのに、濡れたらヤバイと、慌てて起き上がり、母に頼まれたスーパールの袋の中身と、背中のリュックサックが無事なのを確かめたところで、ようやく自分の頭がすっきりしてきた。

……ここはどこなんだ？

そう、確か、女の子がいて、魔法で召喚したと言わなかったか？それで、その子と話していたら、足元がいきなり割れて、青空へ投げ出された……。

見上げた空は、いつの間にやら、曇天模様になっていて、雪が降り始めていた。辺りを見渡せばここが島なんだということは理解できた。だが、いったい何処の島なのか？

もし、才人が植物に詳しいければ、浜辺の奥に生えているヤシの様な木々を見て、南方に植生する木々だとか、判断できたかもしれない。そして、そのような植物が生えている南方に、何故雪が降っているのかと疑問に思ったかもしれない。だが、頭がすっきりしてきたとはいえ、めまぐるしく環境が変わった才人は、自分の置かれた状況に立ち尽くすほかなかった。

ただ、冷たく湿ったジーンズのみが、これが現実だと伝えていた。

「おい、アンタ、アンデッドじゃねえよな？」

遠くから聞こえてきた日本語に驚いて、辺りを見渡すと、浜辺の奥のほうに小さな人影が見えた。こちらに手を降っている。よかった。どうやらここは日本らしい。

才人は人影に向かって歩き出した。

自称、魔法使いのルイ何とかさんは、自分を元の世界に送り返し……いやちよつと待てよと、たった今自分にかけられた言葉を考えた。

さっき自分にむけて言った言葉はおかしくなかったか？

大丈夫か、なら普通だ。

アンデッドじゃねえよな？

ってフツーは言わない。

「よう、アンタ、生きててよかったな」

たどり着いた才人に、そう語りかけた男はやたら背が低かった。才人の半分程度でしかない。寒さのせいか、男の肌はやや青白かったが健康的な生気に満ち、黒髪の一部を二つ編みにして後は背中に流していた。黒い革鎧をまとい、左肩から右腰へ、革でできた投げナイフ用の弾帯を帯び、腰の両側には小剣が吊るされている。

「俺は見ての通りハーフリングだ。名はジーツ、よろしくな、坊っちゃん」

握手を求めてきた、眼鏡のつつちゃん坊やは、にこやかに微笑んだ。

ジーツの目の前に居る黒髪の方ちゃんは、非常に良い服を着ていた。シャーンかどつかの金持ちに間違いない。なにしろ髪はサラサラだし、手も苦労したことのないキレイな手をしている。

嗚呼、オラドラ幸運の神よ！ 感謝します。ついでにトラウエラー機智の神も。

ジーツは、ソウエリ金蔓を得たこの幸運が、これからも続くよう、ン・ホスト主人達と暗黒六帝、それぞれの神々に祈ったのだった。

「よく無事だったな。まあ、坊っちゃんの乗ってた船はバラバラになっちまったが、生きてりゃ万歳だ。積荷は諦めるしかねえやな。寒いだろ？ もうちょつと奥のほうに火を炊いているからな。そこであったまるとしようぜ」

有無を言わず、ジーツは早口でまくしたて、さあさあさと才人の手荷物を取ろうとした。もちろんいくつかの品を、気づかれないうちに懷に収めるつもりだ。

「俺、平賀才人っていうんだ。こっちだとサイト・ヒラガになるのかな」

才人は疑うことなくジーツにスーパーの買い物袋を渡し、陸地へ歩いて行くジーツの後についていった。

「なあ、ジーツさん」

「さん付けはいらないよ、坊っちゃん」

「坊っちゃんは、やめてくれ。聞きたいことあるんだけど？」

「なんだね、サイト坊っちゃん」

焚き火へ向かって歩きながらジーツは才人に答えた。人を食ったような笑みを浮かべながら。

「ここ、地球じゃないよな？」

「チキユウ？　ここはコルスス島さ、コーヴェアとゼンドリックの中間地点だよ」

「神戸と四国の間にある島じゃないんだよな？」

「シコクって何処なんだい？　聞いたこと無いねえ」

ああ、やっぱり日本じゃないんだと、一気に才人は落ち込んだ。だいたい、パープリンとかいう種族なんて、日本どころか、地球に
いるわけがない。映画『ロード・オブ・ザ・リング』に出てきたホ
ビットみたいなものなんだろう。

いったいどうしたら家に帰れるのか？

……魔法で連れてこられたのだから、魔法に詳しい人に聞けば良い
のではないか。

才人はそう考えた。

「あのさ、俺、この世界の住人じゃないんだわ」

「そうかい、そりやすげえや！　サイト坊っちゃんは紺碧シラニアの空の住
人かい？　その割にや羽が見えないね」

「……シラニアってのはよくわからないけど、ジーツさん魔法に詳
しい人知らない？　その人に俺を故郷に魔法で送り返して欲しいん
だ」

その言葉にジーツは動きをとめた。振り返り、才人を見つめるその目には、剣呑と言える程の輝きに満ちている。

「そいつは依頼かい、サイト坊っちゃん？」

その声は、陽気なハーフリングに似合わない程の低く、ドスが籠っている。

「俺は冒険者だぜ？ タダ働きするつもりはないよ。お前さんは今別の世界から来たって言ったよな。ガリファー金貨は持ってたのか？ それとも魔法の品でもくれるってのか？」

「……金貨なんて持ってないよ。でも気にいってくれると思う」

才人はジーツから荷物を取り返すと、ごそごそと袋をあさり、目的の品を取り出した。

「これだよ」

取り出した品はMacallanとラベルの貼ってあるウイスキーだった。

「『お前にはまだ早い』って親父が絶対のませてくれなかった酒なんだ。ジーツさんにまるごと一本進呈するよ」

だめかな？ と、才人はジーツの様子を窺った。

ジーツはニヤリと笑うと、才人の手からウイスキーをひったくった。

「いいぜ。手付には十分すぎる。腕利きの魔法使いにツナギをとっ

てやるよ」

「助かったよ、ジーツさん」

それからさ、と、才人はジーツに言った。

「さつきも言っただけさ、その酒飲んだこと無いんだ。1杯でいいから俺にも飲ませて」

+

タルブロンは焚き火に当たりながら、己の魔法書を読んでいた。が、寒風吹きすさぶ中での読書はページが風にめくられ、それを抑えながらだと、覚えるべき呪文がなかなか頭に入ってこない。

彼は戦闘機械であつたが、感情がないわけではない。

呪文を覚える作業が何度も中断され、苛立ちを覚えていた。いつそ、作業を中断し、ジーツの元へ行くか、今頃、自分の様に苛立っているだろうセリマスの元へむかうべきか、果たしてどちらが作業効率が良いだろうか？

そう思案を始めたウォーフォージドの元に、相棒のジーツが黒髪の少年を連れて戻ってきた。

「よう、相棒、お前さんに客を連れてきたぜ」

「客？」

ミスラル装甲で作られた彼の顔には、表情がまったく表れなかつ

たが、声音は十分に訝しんでいた。こんな辺境で、自分に用のある客とはなんだろうか？

「相棒、こいつサイトっていうんだけどさ、この惑星エベロンを取り巻く13の次元界じゃねえ、別のところから来たんだってよ。それで、お前さんの魔法でピューっとひとつ飛びで故郷に帰りたいんだとさ」

話の、あまりの突拍子のなさに理解が及ばなかったので、タルブロンはジーツからではなく、才人の話を聞くことにした。ジーツはおもしろければ良いと話を拡大する悪癖がある。

「サイト君といったか。詳しく話を聞かせてくれないか？」

その声、姿に才人はびっくりした。

映画『アイアンマン』そのまんまだ！

だが、ジーツに詳しく聞いてみると、中の人のいないアイアンマン、要するに高度なAIが搭載されたロボットだということがわかった。

ロボットなのに魔法を使うとは……この世界パネエ……

焚き火に体を温めつつ、ウィスキーをちびりちびりと飲みながら、才人は今までの事をタルブロンに語った。その間、才人はウィスキーをタルブロンに差し出したが、人間の飲食物は飲めないと断られた。ならばと、才人は父が通勤に使っているスクーターのエンジン・オイルを、タルブロンに差し出した。

それをおっかなびつくり飲んだタルブロンは『美味しい』という感覚を初めて知った。

才人の告白は驚きに満ちていた。

才人の話が本当なら、14番目と15番目の次元界が発見されたことになる。だが、彼の話は嘘ではないとタルブロンは信じた。見せてもらった携帯電話なる物に魔法は使われておらず、見知らぬ物質で出来ていた。精霊が封入されている形跡もない。

また、タルブロンは日本語の文字を見たことがなかった。話し言葉は通じているが、ルイズとかいうウィザードが創りだした召喚の門の効果なのかもしれない。

タルブロンは、自らに湧き上がる知的な興奮に、快哉を叫びそうになった。

「そういうわけで、故郷に帰りたいんだ」

どうにかならないかと不安な顔を浮かべる才人に、タルブロンは言った。

「君を還す呪文はある」

「あるの!？」

「ただ、その呪文に効果があるかどうかはやってみなければわからない」

ぶつつけ本番か……と才人はため息をついた。

「それに、その呪文はこの島の包囲を解かなければムリだ。いつ戦闘があるか分からないから、今は戦闘に必要な呪文を頭にいれている。この島の騒ぎが収まったら、君の要望を受け入れよう」

タルブロンとジーツは、コルソス島の現状をざっと才人に説明したうえで、依頼を受けると明言した。

「君の依頼を受け入れよう。呪文に必要なスクロールの代金は金貨1125枚、さらに技術料をいれてざっと金貨2000枚、端数は割り引きしてあげよう」

「え、金とるの!？」

「たりめーだ。オレ達は冒険者だっていったらうが。報酬がなきゃ依頼は受けないよ」

「魔法使いは研究に何かとお金がかかるのでな。だが……」

タルブロンはエンジンオイルを掲げてみせた。

「これは素晴らしい物だった。さらに金貨500枚割り引こう」

「同感だ。ガランダ氏族の酒も美味いが、こいつはそれに匹敵するぜ」

ジーツはタルブロンと同じくマツカランを掲げた。

「と、いうわけで金貨1000枚だ」

「それでも高いよ!」

才人は抗議した。日本円でいくらになるのか分からないが、とてもない額になるのは間違いない。

「……まあ、それもあのクソ忌々しい竜をどうにかしてからの話だな」

見ろよ、とジーツは顎で才人に空を見るよう促した。

羽を広げ、曇天を滑空する白竜を見た才人は、その美しさと偉大さに圧倒された。あの美しく気高い生き物を見ることができた自分は、幸運なのか、それとも不運なのか逆にわからなくなってしまった。

……結局、ジーツ達とは村の宿屋まで連れてってもらった事になった。

そこからはどんな手段を使っても金を稼がなくてはならない。いや、金を稼ぐ以前に、この脅威から生き残らねばならなかった。

十

元々は海賊が密輸のために使っていたという洞窟の中は、潮風が入り込んだまま流れず、淀むせいなのかやたらと生臭い。遠くから聞こえてくる不気味な詠唱のせいで、才人の気分をより滅入らせた。

才人は小さな棍棒クラヴを持って、おっかなびつくりな足取りで奥へ進んでいった。奥には女性がいて、円形の不思議な扉の前に立っている。

「その少年、止まれ！」

警告する力強い女性の声は、辺りに反響したせいで、実際よりも大音声となって才人には聞こえた。彼女が、ジーツ達のリーダーであるセリマス・ヴィルンだろう。篝火に照らされた蜂蜜色の髪と白い肌、人族と証明する丸耳、鼻筋が通り、面長の美人の目は強い意志に煌き、眉も釣られて上がっている。

その気の強さは同時に彼女の実力も証明している。

彼女は鎖帷子を着込み、胸部、肩、腰、脛を板金で補強していた。補強された板金はスカイブルーに彩られ、盾と胸部には銀炎の紋章シルヴァー・フレイムが銀で彫金されている。

セリマスは油断なく重戦棍ヘヴィー・メイスを構え、才人に問いかけた。

「君は何者だ？」

「あ、オレ、才人つていいいます。ジーツさんとタルブロンさんがここに行けって。貴方がセリマスさん？」

ジーツとタルブロンの名を出すと、彼女は重戦棍をおろし、警戒を解いた。笑みを浮かべ、先程とは打って変わって、柔らかい声音で、安心させるように才人に話しかけた。

「そうよ。セリマス・ヴィルンよ。よろしくねサイト。それにしても……あの二人まだ宝探しをしているの？」

「もう、少ししたら行くって言っていました。その間、セリマスさんというようにって」

その答えを聞いたセリマスはフレイムくそつたれ！と悪態をついた。

「ジーツが遅刻するのは、いつもの事だから仕方ないわ。たまにメイスで頭をカチ割りたくなるけれど」

仕方ないわ、行きましようとか人に行動を促した。

「さっきから聞こえてくる不気味なコレ、なんですか？」

「サファグン達がデイヴァウラーへ祈りを捧げているんでしょう。私たちはそこへ乗り込んで、サファグン達を殺す。そして祭壇を完全に破壊するの。覚悟はいいわね？」

よくないです。

とは、言えなかった。才人はごくりとつばを飲み込み、ただ、うなづいた。

サイトにああ言ったものの、彼が役に立つとは端から考えていない。せいぜい自分の邪魔にならないようにしてくれればいい。

そうセリマスは考えていた。

「サイト、私の呪文を受け入れてね」

レジスト・エナジー
酸、電気に対する抵抗、
リムーブ・ファイア
恐怖除去、祝福、
プレス
エイド
援護、
ブルズ・ストレングス
雄牛の筋力

と、次々に呪文を重ねがけしていく。

才人は体内に湧き上がる、歓喜ともいうべき不思議な感覚に酔いそうだった。

スゲー。やっぱり魔法ってスゲー。

竜や半魚人達に包囲されエライことになってると聞いたときは、はやく地球に帰りたいかったが、安全な地域をちょこつと観光してお土産もらってからでもいいなと考え直した。

……金貨1000枚は一旦忘れよう。

「準備はいい？」

「はい」

才人の答えを聞いたセリマスは扉のレバーを下ろした。複雑な歯車がぎしぎしと音をたて、石造りの円形の扉は、右へ転がりながら壁へ収納されていく。

扉の内側は、自然の洞窟の部分を残しながらも、ランタンや松明を置けるよう手が加えられている。左手にはせり出た岩棚がある。そこへは、粗末な今にも崩れそうな木製のはしごを登れば到達できる。岩棚には鐘がおかれ、もし、見張りがいればこれを叩いて侵入者を仲間に知らせただろう。だが幸いなことに、ディヴァウラーへの儀式に全員が参加しているのか、見張りはいなかった。

奥は鉄格子で行く手を遮られ進めなくなっている。

セリマスは、鉄格子の前まで進み、格子越しに奥へ目を凝らすと、最奥に地面に設置されたレバーと歯車がある。通路は右へとつながっているようだった。その右奥から相変わらず不気味な詠唱が聞こえて来る。格子の近くに目をやると、天井に穴があいてるのを発

見た。左手にはしごがあることを鑑みれば、岩棚の鐘の付近に穴があるはずだった。奥にあるそのレバーを引くことで、目の前の鉄格子が天井に収納される仕組みのようだ。

「サイト、悪いのだけど、はしごをのぼって、奥のレバーを引いてくれないかしら？ 私の重量だとはしごが折れそうなの」

と、恥ずかしそうにセリマスは言った。

いいですよ、行きますと才人は答え、するするとはしごを上り、穴の縁に立った。高さは2メートル程で、砂地に降り立てば、然程音を立てずにすむ。そう判断し、実行した。

べちゃつと踝まで砂が入り込む感触に顔をしかめつつ、奥のレバーに近づいた。

通路の右側は、さらに奥へと繋がっているはずだ。不気味な祈りの声が、絶えず聞こえているし、邪悪な儀式にとやらに参加しているだろうか、見張りなんていないはずだ……。

そう考えて、安心しきって、レバーに近づいた時だった。

松明の明かりの届かぬ影から、ぬっと槍をかまえたサファグンが現れた。

顔は魚、敢えて言うならオコゼと呼ばれる魚に似ているだろう。真っ青な体色で、体は荒波や水圧に耐えうる為か、筋骨逞しく、手は物が握れる程度には指があるものの、足はヒレそのものだ。下半身は申し訳程度にワカメでできた褌のような下着を身につけている。

水中で推進に使う尾ヒレは、地上ではバランスを取る為に役立つ
いて、ヒレという偏平足の欠点を補っていた。

そのサファグンは、難破船から拾ったのだろっ、エアレナルの森
から産出される、デンスウッドという鉄に似た性質の硬く重い木材
を、柄にし、尖った石を穂先にしていた。その石を補強するように、
何か巨大な魚のとがった背骨で石を補強するようにくくりつけてい
る。

侵入者と見て取った、サファグンのただならぬ眼光に、才人は圧
倒された。恐怖除去の呪文の加護を得ていても、予想を覆された驚
きに、頭が真っ白になり、自分が次にどのような行動をすべきなの
かがわからなかった。

サファグンは侵入者を殺すべく、躊躇なく槍を突き出した。

その刹那、脳裏に浮かんだある閃きが、才人を救った。

「海の神様」 ♪ ララララララ ♪

突き出された槍は、棍棒を放り出し、土下座して、演歌のサビを
歌い出した才人を貫くことなく、頭上を通りすぎて行った。

閉ざされた村

コルソス村の唯一の宿屋である波高亭は、もうすぐ昼食の時間を迎える。

禿頭に、ハの字の口髭を蓄えた宿屋の主、人間のシグモンド・バウアーソンは、仕込みをしながら、今朝の報告について考えていた。考えることが山ほどあった。

彼の頭を今、最も悩ましていたのが、村を取り巻く状況だ。はっきり言って芳しくない。

戦力が圧倒的に足りない。白竜の空襲を運良く生き残った^{ハウス・}シグイス氏^ス族の男を通じて、援軍はすでに要請したのだが、先日の戦闘で彼は死亡してしまい、援軍先の返事を聞くことが永久にできなくなってしまった。

「やあ、シグモンド。昼食はできているかな」

かけられた声に振り向くと、ゆったりとした茶色いローブを纏った銀髪の優男がカウンターの向こうに立っていた。ソウジャー^{ハウス}号の船長、リナル・ド・チュラーニだ。名が示す様に、彼はチュラーニ^{・チコラーニ}氏族の若者で客と貨物の両方を運ぶことを商いに行っているエルフである。島に入港し、補給中にこの事件に遭遇した為、幸運にも船に損傷はない。

「今作っている所だよ。船を降りずとも、お前さんならもつと良い飯を食べるだろ？」

シグモンドはサーバーから冷えたエールをリナールに差し出した。

「ずっと船に籠っていると気が滅入るからね、あとはまあ情報収集かな」

エールを受け取り、それを一気に煽ったリナールは酒場の奥を指さした。そこでは、生き残った商船主達がリランダー氏族とデニス氏族の青年二人を相手に激しく意見を戦わしている。いや意見というものではなかった。

「今まで通りスマグラ・レストを通過すればこんな事にはならなかった」

「ハウス・デニスとハウス・リランダーがいながらこの様だ」

漏れ聞こえてくる声は、とにかくこの事態をどうにかして損害賠償をしるというものである。

ハウス・リランダーは《嵐》の龍紋を持ち、船舶に関連した商いを行っているハーフ・エルフの氏族で、この手の商売の総元締めといっても良い。ハウス・デニスは《歩哨》の龍紋を持ち、傭兵を生業としている人間の氏族だ。この二人は積荷を守ることができなかった事を、無闇に責め立てられているのである。でもしない事を責め立てられて、もちろん黙っているわけがない。

「コルソス航路を通るか通らないかは、そっちの自由だろ！」

「ハウス・デニスは君たちの要請を受けて、血潮団の連中が根城にしているミストラル島要塞の攻略にかかりつきりだ。無茶を言うな！」

彼らの怒声にリナールは微笑んだ。

「ようリナール、ご機嫌じゃないか？」

「これでファイアラン氏族の連中が責め立てられていたらもつとご機嫌だったんだがね」

リナールに話しかけたテノールの持ち主は、ハーフ・オークの力トゴス・ド・タラシユクだった。赤茶けた肌に、両サイドに黒く豊かなモミアゲを生やし、唇の両端から牙をのぞかせる凶相でありながら、目元の柔和さがそれを和らげている。

ハウス・タラシユク
タラシユク氏族は竜水晶の採掘と傭兵を生業とする氏族だ。生業を同じとするハウス・デニスとは当然の事ながら仲が悪い。

彼は、ストームリーチにあるタラシユク氏族の居留地へ荷を頼んだ、リナールにとって大事な顧客のひとりである。

「見るよ、デニスの奴らの居心地悪そうなああの面！」

カトゴスはくすくすと笑った。

「これで奴らの評判が落ちてくれれば、我らタラシユク氏族はストーム・リーチで更なる足がかりを得ることができるだろう」

カトゴスの言葉に、さて、それはどうだろうかとリナールが思った所に、村人が血相を変えて、浪高亭に駆け込んで来た。

「大変だ、コボルドが空から降ってきた！」

その場にいた全員が得物を持って飛び出した。

シグモンドは、人型の怪物にダメージを与える魔法の剣、まさしく、伝家の宝刀である長剣を携え、港へ走った。そこには、白鱗のコボルド達が、盾をかまえて円陣を組んでいた。

彼らの中心には気絶しているのか人間の女の子が横たわっていた。

狡猾にも人質のつもりらしい。

警戒組に入っていた村人が、村に残っていた冒険者たちが先に攻撃したのだろう。コボルド達の構えた盾には、クロスボウのボルト^矢が幾本も刺さっている。

コボルドにしてはやや大柄な一匹が、竜語で何かを言ってきたが、こちら側で竜語を使える者はおらずなんて言ったのかわからない。やがて、彼らにも竜語が使えるものがないとわかったのか、彼らの内の一匹がラザー公国訛りの共通語で話して、ようやく事態が判明したのだった。

……船を沈めた竜の名前はオーシルシークス。それが俺達の敵の名だ。

十

「ドク、お嬢さんの様子はどうだ？」

「呼吸はしっかりしてますよ。暖かくなれば目を覚ますでしょう」

ルイズの、規則正しく上下する胸を見て、ドクはディックに答えた。

「まさか、お嬢さんを受け入れてもらえないとはなあ……」

ディックは計算外の事態に愚痴をこぼし始めた。本来の予定では、この人間のお嬢さんを同族のコミュニティに返して、オージルシークス奥様の所へ直接向かうはずだったのである。

ところが、自分達の事情を懇切丁寧に説明したのに、結果はご覧の有様で、村の南門からお嬢さん共々追い出されてしまった。竜はミザリー・ビーク嘆ヶ峰にいと告げられて。

仕方がないから、嘆ヶ峰を目指すことにした。このまま真っすぐ行けば、その麓にたどり着くと言われれば是非もない。

門の外、左手すぐには切り立った崖があり、視線を海へ向けると、直径数十メートルの小島が見える。そこには生贄の木と呼ばれるようになってしまった巨大樹が生えていて、その根は海水ではなく、地下の古代遺跡に貯蓄された、嘆ヶ峰から流れ込んだ雨水を吸収しているという。だが、半魚人達の勢力下にある今は、その真実を確かめる者は誰もいなかったし、そこで邪悪な儀式が行われ、犠牲者が貪り食われたり、ゾンビになったりしているわけだが、その事情を知る前に追い払われたのだった。

4万年前の巨人族と夢の領域ダル・クオールの攻防によってできた溺れ谷の隘路、緩やかな上り坂を80メートル程を南進し（人間のお嬢さんを6匹がかりで担いだ！）洗脳されたと思しき人間たちのバリケードまでやってきた。

居丈高に海神へ帰依せよという脳足りんの片足を「アホ抜かせ」と、鎧袖一触で切り飛ばし、襲いかかる信者やゾンビ、半魚人を叩き伏せ、カニス氏族が数百年前に構築した水道を右手に見ながらひたすら前進し、指なしサッドと名乗る、顎髭を三つ編みにした4本指のドワーフ商人兼冒険者のキャンプにたどり着いた。

彼は商売柄、ある程度の竜語を使えたので、意思疎通は比較的スムーズに行われ、情報交換をすることになった。コボルド達はどうして、嘆ヶ峰の麓にあるキャンプに迎え入れられたのである。

「村の人間たちが、敵に包囲され、疑心暗鬼に陥っているのは間違いないでしょう。我々はある意味で、敵方の関係者ですからね」

ドクとの会話に割り込んできたのはジョー・リーヴゴットだった。共通語が喋れるので、主オージロスの使いとして彼は世界中を放浪した経験を持つ、稀有なコボルドである。

「リーヴゴット、お前さんの共通語は本当に通じているんだろうな？」

ディックが疑わしげに聞くと、リーヴゴットは肩をすくめた。

「多少、ラザー訛りですが、少なくとも世界中を旅する船乗り達に通じているはずですよ。現にサッドには通じていたじゃないですか」「だといいいんだが……恒温生物の考えることはやはりわからん。お前わかるか？」

「多少は……ですね」

「他の連中はどうした？ 休息を命じたはずだが？」

ため息をつきながら、ディックはリーヴゴットに聞いた。ろくでもない答えが返ってくるのは想像がついていた。

「マラーキーが弟への土産にリピーティング・クロスボウをほしがっています。さっきぶち殺した人間たちが持つてないか漁って」

リーヴゴットの声を遮って、アーとコボルドの悲鳴が聞こえてきた。

「ウェブスター、ブル、リーヴゴットは待機！ ドクは付いてこい！」

ディックは手持ちの長剣（人型生物から見れば小剣にしか見えなかったが、コボルド族の意地と名誉にかけてこれは長剣であると彼は言い張った）を携え、悲鳴の現場に行くと、リプトンの尻にボルトが刺さっていた。

「敵はどこだ！」

「敵襲じゃありません事故です！」

ディックは現場のマラーキー達から事情を、ドクはリプトンの治療を行った。

マラーキーの拾ったクロスボウが、リピーティング・クロスボウ（以下リピクロと記述する）ではなかった事に腹を立て、地面に叩きつけた所、衝撃で矢が発射され、リプトンにあたっただけという。

リプトンはうつ伏せになってドクの治療を受けつつ、己の窮状をディックに訴えた。

「……不機嫌な奥様に齧られた傷が、やっと治ったと思ったらこれだ！」

「……幾つ目の傷だ？」

「もう、これで4つ目の尻の穴ですよ！ やってられません！」

「うちの連中の尻の穴が増えるのは年中行事だろ。我慢しろ」

+

ルイズは聞こえてきた子供の悲鳴に意識を取り戻した。そして、聞こえてきたアルビオン語にルイズは驚いた。その声はやたらと甲高く、喉か肺を患っているのか、シュウシュウとしわがれた声をしている。それでいて発音は完璧な *k i n g s A l b i o n* だった。

「ここは……アルビオンなの？」

ルイズは、上体を起こして、そう問いかけた。

「おや、お嬢さん、竜語が使えるのかね？ 人間にしてはなかなか関心なお嬢さんだ」

ラグドリアン湖でわりとよく見かける、ハシビロコウのような顔と嘴。羽毛の代わりには、白磁のタイルの様に美しい鱗が、ぶらぶらと揺れる尻尾までびっしりと敷き詰められている。両手両足に生えた肉食獣のような黒い鉤爪。

そう、声の主は亜人だった。

ルイズは、彼らコボルドに驚き、杖を抜こうとしたが、自分に毛

布（流石に人間サイズではなく長さは足りなかった。道理で腰から下がスースーするとは思った）をかけられている事に気づき、杖から手を離して、礼を述べた。

「私の名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。事情がよくわからないけれど私を助けてくれたのね。ありがとう」

「私の名はウェブスター。礼なら、我らの主オージロスに述べ給え。最もその名誉に預かる機会があればの話だが。たまたま、我々の所に落ちてきた君は運が良かった。そして君の最初の問だがここはアルビオンという場所ではない」

ルイズは、困惑の表情を浮かべながら、トカゲとハシビロコウのハーフの様なウェブスターに再度問うた。

「でも、貴方はアルビオン語でしゃべっているわ」

「これは竜語だよ、お嬢さん。寡聞にして、アルビオン王国という名は聞いたことないな。おい、誰かアルビオン王国って知ってるか？」

ウェブスターが周りのコボルド達に聞くと、全員が一樣に首を振り否定した。

「……ではハルケギニア、トリステイン、ガリア、ゲルマニアという地名も？」

ルイズは目を伏せ、縋るように聞いたが結果は同じであった。

「そう……私は、召喚の門を超えて、とんでもなく遠いところへ来てしまったのね……」

ルイズの漏らしたつぶやきに、ウェブスターは目を輝かせた。

「召喚の門を越えた？ その事について詳しく教えられないか？」

ルイズは語った。

自分の生まれ、故国トリステインの事を。

自分が公爵家の娘として生まれ、貴族の根幹であるメイジとしては欠陥を持つ娘である事を。

進級試験でもある使い魔の召喚の儀式において、使い魔を呼び出す事かなわず、門を超えて使い魔を迎えに来た事を、そこにいたのは……

「そうだ、すっかり忘れていたけど、黒髪で身なりの良い男の子を見なかった？」

顔はブサイクだけど、ルイズはコボルド達に伝えた。

「見たぞ。閣下が呪文を唱えて、浜辺へ降下させた。よっぽどの事がない限り生きてるはずだ」

ルイズに答えたのはディックだった。ルイズが自分の事情を語っている間に戻ってきていた。

「そう、良かった。彼を使い魔にはできないけれど、彼をここに連れてきてしまった責任が私にはあるから……」

火にあたりながら、話を聞いていたサッドは拙いながらも竜語で話しかけた。

「オレ、疑問ある。異なる世界の物、ある？」

話しかけたドワーフを見て、ルイズはまたも目を丸くさせた。こんな背の低い人間は見たことない。

その様子に気づいたウェブスターが、ドワーフ族の事を簡単に説明をして、サッドの問いに対する答えを促した。

「品物？ そうね……お金、かしら」

ルイズは自分のサイフから１エキュー金貨を取り出した。

「この金貨は、ここで使えるかしら？」

サッドはルイズから金貨を受け取り、矯めつ眇めつ眺めて言った。

「ガリファア金貨、違う、でもこれ金、交渉、できる、たぶん」

そうよかったと安堵するルイズにサッドは、ルイズに金貨を返し、あえて共通語で語りかけた。

『お嬢さん、共通語は喋れないのかい？』

ドワーフが喋った共通語を理解できず、ルイズが怪訝な顔をする
と、サッドは首を振って再び竜語で語りかけた。

「共通語しゃべる、しないと、たいへん、はやく、覚える」

「そうね。ミスター・サッド、私に共通語を教えてくださいさる？」

サッドはニヤッと笑って、親指のない右手でグッドサインを出した。

「まかせる！」

二人の様子を見て、ディックは安心した。

商売人だというサッドなら、ルイズの受け入れを拒否した村の連中を、上手く煙に巻いて、彼女の事を認めさせるだろう。

新たな次元が見つかったとはしゃぐウェブスターと違って、ディックは魔法の専門的な話はよく理解できなかったが、ルイズがとんでもなく遠いところから来た、という事だけは理解できた。彼女にとって心細い話だろうが、我々は彼女にばかりかかずらってはいられない。

「ルイズ、ここで別れた」

ディックはそう切り出した。

「……もう行ってしまふの？」

「ああ、奥様を正気に戻して、アルゴネッセンへ速やかに帰らねばならん」

「そう……もう一度お礼を言っわ。本当にありがとう」

ルイズは、膝まづいて深く頭を下げた。

「ああ、竜神の導きがあれば、また会うこともあるだろう」

「私だと始祖ブリミルのお導きがあれば……ね？」

二人は何時しか、どちらともなく笑いあった。

互いに信ずる神は違うのに、共に再会を願うという、奇妙な連帯感に。異郷にて言葉が通じるという安心感は、種族の差を超えるのかもしれない。

「では元気でな、ルイズ」

ディックは「easy company move now!」
と他のコボルド達に号令をかけた。その声に暇を持て余していたコボルド達は、雪玉を投げ合うのをやめて、集合し、己の装具を確認すると、嘆ヶ峰へ歩み去っていった。

+

サファグンは槍を突き出したまま、土下座しながら歌う人間を見つめた。彼は共通語がある程度話せた為に、この人間の歌う言葉が理解できた。

海の神様という言葉は間違いなく、我らの神、ディヴァウラーのことであろう。だがその後続く言葉がわからない。よくわからないが、おそらく、この人間は我らが神に帰依したいというのだろう。そうでなければ、目の前で武器を捨てて土下座なんてするわけがない。

そのサファグンはそう考え、突き出した槍を引つ込め、穂先を上にし、石突きで、海水にぬかるむ地面をトンと付いた。

才人はまだ、サビの部分を繰り返して歌っている。ただ繰り返しているのではない。実はサビの部分しか覚えてなかっただけなのであるが、ただひたすらに海の神様、ラララーと歌っていたのが逆に功を奏した。

「地上人よ、我らが神に帰依するか？」

サファグンは海神への帰依を確認した。

才人は歌うのをやめ、その半魚人の顔を見た。

学校の成績が、ちょっとばかり悪い才人は『帰依』という言葉がわからず、困惑していた。普通、高校の国語では出ることのない、馴染みのない言葉だったので無理もない。

普段、空気の読めない才人であるが、命の危険がかかっているこの時ばかりは、どうにか場の雰囲気を読み取った。

「はい、キイエーします」

その言葉を聞いたサファグンは目を閉じ、口の端を歪め、満足そうに頷いた。

その一瞬、

……サファグンは夢想する。いつの日か、地上に住まう、すべての者を傳かせるその日のことを。そしていつしか、地上は遍く海中に沈み、すべて生き物にエラが生え、デイクアウラーの腕に抱かれるのだ。そうして、この世は本当の楽園になる。

大きく育ったテーブルサンゴに腰をおろし、美しく茂った枝サンゴを、贈り物にして愛を語ろう。伴侶になったくれたその者に、愛しき吾が子を、たくさんの卵を産んでもらうのだ……

才人に、ウィザードとしての秘術的視覚アイケイン・サイトが備わっているなら、サファグンの頭部に纏わり付く赤い渦が見えただろう。

目を閉じて満足そうに、うんうんと何度も頷きはじめたサファグンを才人は、不思議そうに見つめた。

「サイト、今だ、レバーを引け！」

小さいが、鋭いその声に鉄格子の方を見ると、いつのまにやら、ジーツ達とセリマスと合流していた。

「サイト、急いで！」

セリマスのその声に、才人は起き上がり、土下座した自分の横、地面に設置してあるレバーを見た。レバーは右に倒れている。これを左にスィッチすれば、あの鉄格子があがるのだろう。どういう仕組みなのかかわからないが、レバーの根元には複雑に入り組んだ歯車がいくつも噛み合っているのが見えた。

才人は力いっぱいをそれを左に引いた。ガラガラと音を立てる歯車と同時に、鉄格子が上にあがってゆく。

「サイト、棍棒を拾って少し離れる！」

言うが早いか、ジーツは胸元の弾帯から、投げナイフを取り出し、サファグンに向けて投擲した。投げられたナイフはジーツの狙い通り、サファグンの大きな左の魚眼に突き刺さった。

タルブロンヒュブノティズムの唱えた呪文、催眠の影響を受け、己の夢を投影していたサファグンの悲鳴が上がる。サファグンはあまりの激痛にたまらず、混乱し、目を押さえながら蹲った。

それは、戦闘において、あまりにも致命的な隙だった。

猫のように靱やかに、鋭く、油断無く接近したセリマスは、銀炎の御名を称えつつ、重戦棍を振り下ろし、サファグンの後頭部を容赦なく叩き潰した。

囚人6号

激しく痙攣していたサファグンは、やがて静かになり、完全に動かなくなった。ドス黒い血がゆっくりと地面に浸透してゆく。

重戦棍を振るって血を払い飛ばしたセリマスは、安堵の溜息を付いた。よもや、目の前の少年がいきなり武器を放り捨て、土下座をかますとは思わなかった。運良く、敵の初撃を交わせたから良いものの、通常ならその場で人生が終わっていただろう。

「サイト、大丈夫!？」

セリマスは才人の様子を伺った。

才人は顔を青ざめさせて、立ちすくんでいた。体を瘡の様に震わせている。

「おい、サイトしっかりしろや」

ジーツが才人の体をトンと小突くと、「え? あ?」と、ようやくその魂を現世に戻らせた。

ジーツは背負い袋から、サイトから進呈された酒瓶を取り出し、「一息付け」とムリヤリ才人の口に流し込んだ。無理やり押し込まれた液体を飲みきれず、たまらず才人は、むせてmacallanを吐き出した。

「ちょ、ジーツさん! いきなり何するんだよ!」

「しっかりしろ。ここでヘタレると全員の命に関わるんだよ。気合
いれるボケ」

ジーツは才人の尻を軽く蹴飛ばした。

「お前、ホントにお坊ちゃんなんだな？ 死体見るのはじめてか？」

恐怖を除去する呪文のせいで恐怖は覚えていないが、自分が殺されそうになった事や、セリマスが躊躇なく命を奪い取ったことに才人は衝撃を覚えていた。正直な話、胸と胃のむつかきが酷い。この場で吐きたいくらいである。

「死体どこるか、その、ジーツさんやセリマスさんには悪いけど、誰かが暴力を振るう所を見るのも初めてだよ……」

できるだけサファグンの死体を見ないようにしながら、か細い声で、才人は答えた。

セリマスは才人の答えにひどく驚いた。いくらお坊っちゃんと言えどそんな事がありうるのか？

「え、うそでしょう？ 貴方、最終戦争の時どこにいたのよ？」

「あー、セリマス、それなんだが……サイト、別の次元の住人だから」

事もなげに言うジーツに「はあ！？ ジーツ、貴方またいい加減な事言つて」とセリマスは噛み付いた。

「いや、マジなんだって！」

「二人ともその辺にしよう。ここを突破せねば」

口論になりかけた二人をタルブロンが制した。

「お嬢様、そこらへんの詳しい話はあとで私から報告します」

「わかりました。先をいそぎましょう。その前に……タルブロン、
サイトに達人の手腕の呪文をかけた方がいいわ」
マスタース・タッチ

セリマスの意見にタルブロンは同意し、才人の手をとって呪文を唱えた。

才人の脳裏に、自分が手にとっている棍棒をどういう風に扱えばいいのか、情報が流れこんでくる。

「サイト君、棍棒を振ってみたまえ。今の君なら、どう扱えばいいのかわかるはずだ」

タルブロンに促され、野球で振るバットの様ではなく、自分に危害を加えようとする何者かの攻撃を交わし、逆に相手の急所に一撃を加えるという、言わばシャドーボクシングの要領で、才人は棍棒を振るった。

呪文の加護を得て、軽々と棍棒を振り回す才人を見たジーツは、才人がどのような想定で武器を振るっているのかをはつきりと理解した。静かに右足を一步踏み出し、左腰の小剣を右手で抜くと、才人に素早く、下から上へと切り上げた。

才人はすかさず反応し、棍棒でそれを受け止め、体格差を活かしてジーツの態勢を崩そうと、左肩を前面に押し出しタックルをしかける。剣を振り抜いた態勢にあるジーツは、己の左手を右腰の小剣にのばしつつ、才人のタックルを交わした。左手の小剣を抜くより

も速く、才人のタツクルが迫ってきたために、早抜きクイック・ドロウの技法を習得しているジーツと言えど、腹に突き刺すには、僅かに間に合わない。

ジーツは、タツクルをかわしてがら空きになった、無防備な背中に左手の小剣を突き出した。

背中に危険を感じた才人は勢い良く前転し、その攻撃を避け、棍棒を構えて立ち上がる。

歴戦の古強者……と、まではいかないが、自分の身を守るだけなら、その動きは十分合格点といえた。

「ま、こんなもんか」

ジーツは鞘に剣を戻して言った。

「才人、これから敵中を突破するわけだが、自分から突っ込むなよ？ 自分に向かって来た奴だけ相手しろ。相手が複数で来たときは俺たちの所に敵を連れてこい。いいな？」

才人は真剣な表情で頷いた。

+

いつしか不気味な詠唱は止んでいた。

その事にベテラン冒険者三人は気づき、歩をより慎重に進めてゆく。道中の壁には、蛇のレリーフが刻まれた飾り棚があり、その脇

には松明が、奥へ、奥へと誘うように辺り照らしている。

歩を進めた先々に、サファグンの言葉であろう、何がしかの落書きが、朱色の染料で描かれているが、誰にもそれは読めなかった。タルブロンによると、サファグン達は自分達とは見える色が若干違うのだという。彼らにとって朱色は何らかの意味を持つ色なのだろう。それが宗教的な意味なのか、それとも単に実用的な物なのかまではわからなかった。

曲がりくねった洞窟の先は、またしても、レバーのある円形の扉だった。

誰かが扉の内側で会話しているのに気づいたのは、ジーツだった。独特の音階を持った舌打ちを2度すると、二人は合図に気づいたのか、動きをとめ、静かになった。

才人も二人を真似て大人しく、一切の音をださないように細心の注意を払う。

ジーツは、扉に近づき、耳を当て、内部の会話を真剣に聞き取った。会話の端々に、ちゃぷちゃぷと水の音が聞こえるところから、海水が流れ込んでいるのかもしれない。

ーここは何処だ？

ーコルソス村だ。

ー何が欲しい？ 金か？ それとも俺の命か？

「私がほしいのは情報だ。脳に刺激を与える情報だ。私は、な。」

「助けてくれ！ 私はまだ死にたくない！ こいつらはどうなってもいいから私だけは助けてくれ！」

「バカヤロウ！ お前はどっちの味方だ！？ エラ野郎に屈するのか！」

「いずれ判る。さあお前の秘密を吐くんだ。情報だ、情報だ。」

「喋るものか！」

「どんな手段を講じてでも喋らせてやる。いや、喋らせてくださいと頼み込むようになるだろう。」

「お前は誰だ。名前を言え！」

「私は新しいN O . 2だ。」

「N O . 1は誰だ？」

「お前は生簀の囚人6号だ。」

「番号なんかで呼ぶな！ 私は自由な人間だ！」

「……ヤバイな、そろそろ踏み込まないと見せしめに誰か殺られそうだな」

眉を寄せ、そう呟くジーツに、セリマスは敵の数と捕まっている

人の数は？ と聞き返した。

「囚人の数は最低でも6人。敵は最低12匹以上、アホだつたら6匹以下」

「アホだつたらいいわねえ……」

そのほうが楽でいいわ、とセリマスはこぼした。連日の戦いのせいか表情は疲れており、重戦棍を肩叩き代わりに使っている。

「手順を確認するわ、私が3匹、ジーツは短時間なら4匹はいけるわね？」

「ああ、タルブロンは催眠と蜘蛛の巣ヒュブノティズウエブの呪文で、できるだけ足止めしてくれ」

「心得た。サイト君はこのレバーを引いてくれ。そうして我々が突撃して、5秒たつたら来てくれ。できれば戦闘には加わらず、敵にとらわれている人達をどうにか救出してほしい。敵が来たら、ジーツの方に引き寄せてくれ」

「OK、無理はしないよ」

才人は棍棒を掲げた。先程とは違って、強い意志と目の輝きを見たセリマスは「大丈夫そうね」と安堵した。

「タルブロン、透明化トウメイカを」

「心得た。その後に加速の呪文ヘイストだな？」

「いつもどおりに、な」

ニヤリとジーツが笑う。タルブロンは幻術に特化したアークメイジである。極めて低コストの精神力で透明化の呪文をかけることができる。タルブロンは自分を含めた3人に呪文をかけた。才人にはまだ、かけない。移動、呪文の詠唱、会話以外の行動をすると呪文

がとけてしまうからだ。

タルブロンが指先を複雑に動かしながら、万歳をするように腕を動かすと、自分の体に未知の力が侵入しくるのを才人は知覚した。何気ない、ちょっとした動きでもいつもの倍以上に素早く動かせる。

「レバーを引け！」

ジーツの鋭い声にレバーを引くと、「呐喊！」とセリマスが吠え、二人は突撃していった。

十

セリマスの呐喊という怒声よりも速く、扉の内側にするりと入り込んだジーツは、内部の状況を一瞬で見取った。

そこは、広大な広間だった。右側には海賊たちが掘ったであろう飾り棚と松明をいれる穴がぽつんとあり、広間の左側には、さらに奥へ続く円形扉がある。レバーの代わりに扉の中央には大きな鍵穴がついている。

広間の奥には、洞窟入口にあったような岩棚が設けられ、その高さは跳躍ジャンプの呪文の加護を得ても手に届かない高さにあり、敵襲を味方知らせることができるよう、釣鐘が設置されていた。

敵も期待したほどアホではないらしく、釣鐘の付近には、3匹のサファグン達サファグンがいた。

岩棚の下、広間の地べたには、格子状の蓋を被せた生簀が6つあり、その格子に必死に齧りついて呼吸をしている囚人いる。そこまで海水が来ているのだらう。そして、当然の事ながら、生簀には、それぞれ1匹ずつ、サファグン達が石槍を手にし、海面から必死に口をだして、空気を取り込んでいる哀れな囚人達を、ある者は指さして笑い、ある者は啄いて遊んでいる。

左から3つ目、広間中央にあるの生簀には、白いロープを纏った、白髪の初老の男が立っていた。透明化の呪文でジーツがみえていないので、視線はそちらを見ていない。

「敵しゅ」

初老の男は、敵襲と最後まで言う事は、叶わなかった。

ジーツが突風の様に、男の懷に飛び込み、小剣を喉笛に叩き込み、同時に男の腹を蹴り飛ばす。男は吹出す血を止めようと、喉笛を押さえ込みながらバタバタともがいたが、やがて動かなくなった。その早業に生簀のサファグン達は啞然としていたが、魔法が解けて、姿が露見したジーツに気づくと唸りをあげて、襲いかかった。

インフルウド・アンキャニー・タッジ

熟練のローグは、強化直感回避と呼ばれる技能を習得している。もちろんジーツもだ。ジーツは、自分を四方八方取り囲んだ、荒波と水圧に耐える筋骨隆々の半魚人を、一度に6匹も相手にしながら、なお不敵に微笑んでいた。

前後左右から繰り出された6本の石槍を、横っ飛びに跳んで交わし、ハーフリングの小さい体格を活かして、右に陣取っていたサファグンの股下へ転がり込む。

岩棚にいた3匹が、鐘をならそうとして、極度の粘性を持つ蜘蛛の巣に阻まれたのを、ジーツは転がりながら視界の端に捉えた。

自分の相棒はいつだって最高だな！

転がりこんだ先のサファグンの太腿へ斬りつけて、ジーツは包囲を脱出した。大量出血という置き土産で、敵戦力を削る。足を斬りつけられたサファグンは、己の血の海で溺れのたうちまわった。それを見たサファグン達はわずかに動揺した。

その一瞬の隙を、セリマスは逃さなかった。

「銀炎よ、守り給えかし！」

ジーツを包囲し、背後から槍を突き出したサファグンは、セリマスに無防備な後頭部を晒していた。セリマスの重戦棍が襲いかかり、これを粉碎。血の華を散らして、そのサファグンは倒れ伏す。これで2匹。

ジーツとセリマスは残り2匹ずつを相手にすればいい。

「また不意打ちかよ。正々堂々と相手にするのが信条じゃなかったのか？」

「敵に隙を見せるほうが悪いのよ」

最終戦争を戦い抜いた、歴戦のローグとクレリックは互いに軽口を叩きながら、残りのサファグンを相手取る。

カルナス戦線の、生前の知性を保持したアンデッドによる特殊部隊と違って、不意打ちも効くし、血を流して死んでくれる。

なんとありがたい敵であることが！

隣り合ったジーツとセリマスは、互いの得物をチンと軽く打ち鳴らすと、猛然と目の前の敵に襲いかかった。

十

タルブロン of の言いつけ通り、5秒遅れて扉の内部に入った才人は、戦闘しているセリマスとジーツから、最も離れた生簀に小走りで近寄った。

生簀には、海水の冷たさにより、顔を青ざめさせたエルフの男性が、格子に必死にかじりついている。彼はどうかその格子を持ち上げようとしているが、冷え切って、弱っている彼の筋力では開けることができないらしい。

いや、よく見ると、大きな南京錠の様な鍵がついている。

鍵は、生簀の地下から溢れる海水で至る所に錆が浮いており、棍棒で何度か殴りつければ簡単に破壊できそうだ。

才人は棍棒でそれを殴りつけ破壊した。魔法が解け、姿を現した才人を見た囚人たちは「オレも助けてくれ！」「ここからだしてくれ！」と騒ぎ始めた。

「助けるから！ 静かにして！ あんまり騒ぐと他の敵が来ちゃうから！」

囚人たちに注意を促し、次々と鍵を破壊して格子を持ち上げた。魔法で筋力を増強している才人は簡単に持ち上げることができた。

大半の囚人たちは自力で這いでてきたが、エルフの男性だけが出てこない。才人は再び彼に近寄って「大丈夫ですか？」と手を差し出し、陸へ引きずりあげた。弱ったエルフは「ありがとう」と一言述べ、地ベタに座り込んだ。短く刈り込んだ金髪だけでなく、彼の着ている革鎧からも、しとどに海水が垂れていた。

「私の名はウルビアン。助かったよ」

「才人です。俺もあそこで戦っている人たちに助けられたんです。困ったときはお互い様ですよ」

和やかに自己紹介をしていると、ある囚人が別の囚人に掴みかかり、思い切り殴った。

才人は慌てて間に入り、殴った男を引き剥がそうとした。しかし男は怒り狂って、手がつけられない。あげく、呪文の加護が終了したせいで余計に手間どった。結局、ウルビアンも間に入って、どうにか場は収まった。

殴られた男は「殺されるのが怖かったんだ。許してくれ、許してくれ」と泣きじゃくり、鼻血と涙で顔をぐしゃぐしゃにして謝り続けた。

才人が詳しく両者に話を聞くと、殴られた男、ジャコビー・ドレクセルハンドは、恐怖のあまり、他の連中はどうなってもいいから、オレだけは助けてくれと叫んでしまったらしい。それが他の生存者の怒りを買ったのだという。しかも彼はコルソス島の網元の息子で

あり、よりにもよって得意先の担当者を、己の命の代償に差し出したのだった。

「それは流石に……」

弁護できないと、才人は続けられなかった。

自分の身に置き換えて考えて見れば、同じようなことを叫ばないとは断言できなかった。そのうえ、才人には、両者を黙らせる力もない。

ただ、語尾を濁すほかなかった。

「お前ら、何揉めてんだ？」

そうこうする内に戦闘はすべて終了し、ジーツ達に戻ってきた。

話を聞いたジーツはアホらしいと、すべてを無視して、さらに奥への扉に近づいてゆく。

「え？ あの、仲裁しないの？」

才人が驚いて聞くと「金もらってないのに？」と逆に聞き返された。才人が哑然としてみると、ジーツは殴った男、ダクス・ブーンと名乗る交易商人に向かって言った。

「まあ、ジャコビーを殺りたいならいうなら、殺れば？」

「ちよ、ジーツさん、それは！」

才人を遮ってジーツは続けた。

「それが敵の狙いだと思うけどね」

その意見にはセリマスも同意した。

「……そうね、ただ、殺るなら私の目の届かないところで殺ってちようだい。目の前でやられたら、ガリファー法典を破った現行犯として逮捕しないといけないもの」

ちなみに銀炎教団では、コルソスはストームリーチ管区なのでソウルゲート砦に収監されるわよと、セリマスはダクスに向かって咲き誇る華のような笑顔でのたまった。

返り血を浴び、それを拭おうともしない美女の微笑みは凄絶にすぎた。

「コルソス村の現有戦力はいいとこ、50人だ。我々が調査したところ、敵兵力は白竜抜きで700を越えている。これ以上の戦力低下は避けたいところだな」

タルブロン言葉にダクスはついに折れた。

「とりあえず、ここから出よう。そこから先は話しあおうじゃないか、なあ、ジャコビー」

「……はい、すみませんでした……」

袖で鼻血を拭いながら、ジャコビーはダクスに謝罪した。

「話がついたか？」

ジーツは鍵穴を盗賊道具で扉の鍵穴をいじりながら聞いた。

「待ってる。もうちょいで開くから……っとホラ開いた」

巨大な鍵穴から手を抜き出すと同時に扉が壁へ収納されてゆく。

そこにいたのは、十二匹のサファグン達だった。

ジーツは気色ばんで叫んだ

「逃げろ！」

その叫びもむなしく、サファグンの一匹の指先から2条の紫光がふわりと、飛んできて、ダクスの背中を貫いた。

ダクスは自身を襲った激しい苦痛に血を吐き、絶命した。

奥様のペット

嘆ヶ峰の麓には、サッドの言うとおり、洞窟がぽっかりと口を開けて待っていた。

雪風の舞う外とは違い、中は風をまったく感じることなく、程よい低温に保たれている。外法により蠢く死体と化せられた犠牲者達を保存するなら、ここより適した場所はないだろう。敵の本拠地は間違いなく、此処にあり、自分たちが目指す奥様もこの奥にいるのだとディックは確信していた。

ディックは、先ほど騒ぎを起こしたマラーキーを、ポイントマンとして指名した。ポイントマンとは、先頭に立つことで、味方に危険を知らせる役割を言う。これは罰だからではなく、彼がこのチームの中で最も耳が良く、様々な音が反響する洞窟の中では、目の良さよりも、耳の良さが、敵の存在を素早く察知する最良の手段であるからだ。

マラーキーは文句を言うことなく、その任務についた。彼の隣にいるのは、このチームの中で、最も良い目を持っているシフティである。

彼はレンジャーとしての技能を持ち、獲物をよく仕留める弓の名字で、彼はその腕で後方支援射撃のために、今回は参集された。ついでに、腹を空かして待っているだろう妻子の為に、何らかの獲物を狩ってから帰る予定である……と、いうのも、オージロス閣下は、十分な食料を給料としてコボルド達に分け与えてくれているのだが、オージルシークス奥様は、「階段の掃除がなっていない」「窓が汚れている」「ほら、ご覧なさい埃がこんなに！」等と、因縁、もと

い、たいへん清掃に厳しく、口憚る事ながら、苛酷な御方であるため、罰として食事を抜かれることがあるからだった。

その時、出番となるのがシフティだ。

彼の弓の腕は実に素晴らしく、おかげで、コボルド達はとうにか生きてゆくことができるのだった。

コボルド達は彼にいくら感謝してもしきれないくらいである。ただ、彼がどこから食料を得ているのか、自分たちが口になっている肉がいったい何の肉なのか、頑として口を割ろうとしないのが不思議といえば不思議であつた。

マラーキーを先頭に、シフティ、リーヴゴット、ディック、ブルリプトン、ウェブスター、ドク、ラス、トイ、フーブラー、ガルニアと洞窟内部へ入る。

洞窟の内部は、入ってすぐ前方と左に道が分かれていて、それぞれに円形扉があり、地面にはレバーが設置されてある。さて、どちらへゆくべきかと、ディックが思案していると、両サイドの扉が同時に開いた。

「新しい肉だ！」

「侵入者を殺せ！」

等と、物騒な声と共に、死肉を漁るグール、ワイト、死体にされた哀れな拉致犠牲者、洗脳された村の者たちが得物をもって雲霞の如く押し寄せた。

「盾をかまえる！」

ディックは枯らさんばかりに大声を張り上げた。その声に、リプトンとウェブスターが敵の足止めをすべく呪文を唱え始める。他の隊員たちは、盾を構え、敵の弓矢から術者達を守る為に彼等の前へ立った。

洗脳された村の猟師達から放たれた矢は、心を寒からしめる風切り音を立て、隊員たちの盾に突き刺さる。2本、3本と弾き返すも、中には盾を貫通してようやく止まる剛の矢もあった。

呪文の完成はまだかと、焦りが生まれ、接敵目前となった時、ウェブスターの呪文が完成した。

押し寄せる敵の足元に蜘蛛の巣が張られると、それに絡め取られた敵がつんのめり、後続をも巻き込んで倒れ伏す。そこへリプトンの油の呪文が完成した。蜘蛛の巣をなんとか避けても、油に足をとられた敵の一部は、地面と熱烈なキスをするはめになった。

盾を構えてた隊員たちは、転んだ敵の首を切り裂き、或いは、短槍で背中から心臓を刺し貫いて、少しでも敵戦力を削っていった。

ウェブスターとリプトンは交互に呪文を唱え続けた。

合図によって味方はさつと後退し、ウェブスターの火球《ファイアー・ボール》の呪文が完成し、容赦なく敵に振舞われる。巨大な火球は、油に塗れた者たちへと飛んでゆき、恐るべき炎の力が解き放されると、その威力に壁にまで吹き飛ばされ、首を折って動かなくなる者、火達磨になり、泣き叫びながら、助けを縋って味方に炎を移してゆく者、生者と死者の混成軍は共に怒りと苦痛のハーモニ

「を奏でつつ「侵入者を殺せ」を合言葉に、ただ、ひたすら押し迫ってくる。

侵入者の数はわずか12匹。敵がいかな強力な秘術使いといえど、押しつぶせば事足りる。敵の指揮官は、そう判断したのだろう、そしてそれは正しい。

ディック達は再度盾を構えて、少しずつ後退をはじめた。

ウェブスターは、位階が、いま少し高ければ火壁を焚いて、敵を直接丸焼きにできたのだが……と、詮無いことを考えつつ、ひたすら火球を放り続けた。

リプトンは呪文で油を巻き続け、蠢く死体達を火葬する、仕事をつづけるほかなかった。

死人を30人ほどウェルダンに焼き上げた時点で、ディックは決断を迫られた。今は比較的利益であるが、リプトン達の精神力がいずれは尽きる。敵がどれほど、いるかわからない現時点では、サツドのキャンプに後退し、可能なら人間の村まで撤退、以後そこを拠点に、村の人間たちと脳足りん共を一人残らず屠るべきだった。

「もうそこに、奥様がいるというのに、後退せねばなんのか！」

ディックはたまらず叫んだ。

「『おらの名前はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールだす。よろしくしてけれ』はい、俺の後、続けて？」

サッドがそう言うと、サッドの口と舌の動きを真剣に見ていたルイズは、神妙な顔をして、名乗りの挨拶を発声した。

『お、おれ…… Louise Francoise le Blanc de la Valliereです。よ、よろしくしていきり』

「『おれ』じゃなくて『おら』、『です』じゃなくて『だす』もう一回」

『おら、 Louise Francoise le Blanc de la Valliereだす。よろしくしていきり』

「んー、『よろしくしてけれ』の発音、違う。『よろしくしてけれ』

『よろしくしてけれ』

「よし。はい、もう一回最初から……あ」

と、サッドは空を見上げ、ルイズも釣られて見上げたが、そこには曇天から舞い降りてくる雪しか見えなかった。

「ルイズ、俺、言葉教えない、いいかも」

サッドはルイズを見て言った。

「え？ どういうこと？」

「俺の言葉、発音が男性的、ルイズはお嬢さん。だから、言葉遣いに変になる」

「……ああ、言われてみればそうかもしれないわ」

「連れに女の子いる。彼女、偵察から戻る。言葉は教えてもらうの

は、彼女がいい、彼女も竜語を喋れる、少し」

サッドによると、連れの女性がいるという。

同じドワーフ族でコル・コランに仕える僧侶（コル・コランとは、どうも神様の名前のようだ。サッドによると、この世界は複数の神様がいて、コル・コランは商業と富を司る神なのだという）で、名をフラワーといい、彼女は両親が付けた、その可愛らしすぎる名前で、しょっちゅう詭ねられているから、彼女の名前について、あまり触れないで欲しいと言った。

続けてサッドは「言葉教える。けれど、自分、女性らしい言葉遣い、発音、ムリ。彼女に聞いて。あと、俺、訛りある。ラザー訛り。でも、フラワーはシャーンで育った。訛りない」とルイズに謝った。

ルイズは、彼の言うとおりだと思ったので、謝ることはない、配慮してくれてありがとうと、礼をのべた。

自分の子供の頃を思い浮かべると、淑女らしい礼儀作法と言葉使いは、長姉エレオノールと母カリーヌがきびしく躡たものだ。両者の都合がつかない場合は、次姉カトレアが、それでも都合がつかない場合は、臨時に雇われたグーヴェルナントが授業を行った。もしも、父や、雇われのチューター男性家庭教師が礼儀作法の授業を行っていたら、今のルイズは男性的な振る舞いや言葉遣いをしていただろう。

『あら、叔父さん、その子どうしたの？』

その声のした方を向くと、金鎖の様な髪を三つ編みにして後ろに流したドワーフの女性が立っていた。樽のような体型に、低い身長も相まって、ずんぐりむっくりという言葉がこれほど似合う人物も

珍しいだろう。それでいて、浅黒い肌に、だんご鼻で下唇が厚く、ルイズを見つめる蒼い瞳は、面白い物をみつけた子供のようにクリクリとよく動いている。彼女の両親がフラワーと名付けたのも頷けるほど、愛嬌のある顔だった。

残念ながらヒゲは生えていない。

白銀の板金鎧は、いかにも下ろし立てと言わんばかりで、左手にかまえた盾も、腰に携えたモーニングスターも新品同様にピカピカだった。

ルイズは、彼女が腰に携えている武器の、あまりの刺々しさに、目を丸くした。彼女は神に仕える僧侶だという話だが、故郷の基準で考えるなら、持つべき物は杖なのではないか？　だがここはハルケギニアから遠く離れた場所である。その地にはその地の、信仰のあり方というものがあるのだろう。

ルイズは一度立ち上がったから、膝をおり、トリストイン式の、淑女と呼ぶにふさわしい礼をした。

『おら、Louise Francoise le Blanc de la Valliereだす。よろしくしてくれ』

『……フラワーです。貴方、ラザー公国生まれなの？』

それを聞いたサッドは爆笑した。

きゆるり。きゆるきゆる。

何か小鳥の鳴くような声を聞いた気がしたルイズは辺りを見回した。しかし、キャンプの周りには小鳥等は飛んでいない。飛んでいるのは、遙か遠い海原に、微かに見える白竜だけだ。サッドとフラワーの、言い争いは、当然の事ながら聞き取れず、仲裁もできない。自分のことで言い争いになっているのは理解できるが、どうしたものか。

きゆるり。きゆるきゆる。

また聞こえた、何だろうとルイズが怪訝に思っていると、サッドとフラワーの言い争いが止んだ。彼等は、油断無く、目を配り、得物を引き抜いた。サッドは左手でドワーヴン・アックスを、フラワーはモーニングスターを。

「ルイズ、ゆつくりと立ち上がる」

サッドはルイズに行動を促した。

「何？ 何なの？」

「わからない。でも何かいる……」

「『3人で背中合わせになって援護し合いましょう』ルイズ、呪文を受け入れて」

フラワーは信仰呪文を唱えるのに必要な物質要素、即ち、小さなろっそくのかけらと、乾燥させ匂いを抜いた牛糞を握りこみながら、

指先で聖印を結んでいく。雄牛の筋力の呪文を自分とサッドに、信ブルズ・ストレングス
仰ド・オブ・フェイアレスの盾と祝福、冷氣に対する抵抗を全員に掛け、最後に召喚でシラレジスト・エナジー
ニアからの来訪者と呼ばれる栗毛の毛並みが美しい犬を呼び出した。サモン・モンズをレ

ルイズはフラワーが杖を使わずに呪文を掛けるのに驚き、自分の使い魔を召喚したのにも驚いた。だが彼女が一番驚いたのは、自分に掛けられた3つの呪文だ。最初自分の体に、魔法の力でできた膜のようなものが感じられ、次の呪文は、恐怖心が少しだけ和らいだ気がする。最後の呪文は冷氣が和らいだ。

フラワーの系統は水に近いのだろう。ただここでは信仰呪文と、呼び方が違うだけの事なのかもしれない。さらに学業の優秀なルイズは、フラワーが何かを握りこみながら呪文を唱えるのをしっかりと見ていた。そして、杖を用いずに魔法を使う亜人達の秘密の一端を、知ることができたのではないかと思った。

『わんこは10分間だけど、十分よね?』

「『たぶんな』ルイズ、背中をあわせる。お互いを援護する」

3人は、互いに背中合わせになった。一人の持ち場は120度。加えて唸り声を上げる犬が一匹。油断無く辺りを伺う。

ルイズはすでに杖を抜いている。怪しげな者が現れれば、即座に錬金の呪文で吹き飛ばすつもりだ。

きゅるり、きゅるきゅる。

その鳴き声が3度聞こえた時、セレスチャル・ドッグは何度も大

きく吠えながら、崖に走りだした。もう、ほんの数メートルというところで、雪に覆われた地面が盛り上がり、無き声の主が姿を現した。口元をせわしなく動かし、複眼は捉えた獲物のどの部位の血を啜るのが良いのか思案しているかに見える。鈍重そうな体は白い産毛と降り積もった雪に覆われ、偽装するのに困らない。長さ1メートルに渡る8本の足はその巨体を支えるのには細かったが、十分な強度と筋繊維を有していた。

アイス・スパイダー。

それが鳴き声の正体だった。

彼女はこの新しい環境に満足していた。

あの巨大なメスの掌に乗って、「私の可愛いシシツク」と、冷たい息を吐かれるのは好きだった。だが、彼女の足元でちよろちよろ動く生き物は大嫌いだった。大切な卵を生んだ端から搔つ攫い、生まれた子供を殺していったからだ。頭に來たので血を吸ってやった。それから手の届かない所からチクチク攻撃されるようになった。

でも、もうあいつらはいない。

好きなだけ卵を産める。

好きなだけ新鮮な肉を嚙れる。

好きなだけ血を啜れる。

今、目の前に新しい肉がある。

さあ、新鮮な血を啜ろう……。

セレスチャル・ドッグが助走をつけ、跳びかかるようにしたが、それよりも速く、彼女は糸を吐出し、絡めとった。

サッドとフラワーは二人して雄叫びをあげ、蜘蛛に駆け寄り、斧と星型鈍器をふり下ろしたが、鈍重そうに見えて意外に俊敏な蜘蛛は、ピヨンと横に飛び跳ねて攻撃を交わした。

蜘蛛の俊敏さに対応するべく、サッドとフラワーは蜘蛛を挟み撃ちにしようと、互いの間合いを広く取り、再度攻撃をしかける。が、これも蜘蛛は避け、口から氷の球をフラワーに吐きかけた。

フラワーは左手にある盾を斜めに構えて、その雪玉を流そうとしたが、雪玉は結構な質量があったらしく、フラワーは態勢を崩し後ろに仰け反った。がら空きになった腹へすかさず前肢を伸ばし、彼女に強かな打撃を蜘蛛は与えた。

『ぐうつ！』

鈍痛に蹈躑を踏みながら、なおもフラワーは闘志を捨てず、盾とモーニングスターを構え直した。

目前に現れた巨大な蜘蛛に、半ば呆然としていたルイズだが、サッドとフラワーが蜘蛛から離れていると見て取るや、即座に鍊金の

呪文を唱えて蜘蛛を攻撃した。

「イル・アース・デル！」

呪文を唱え、杖を蜘蛛に向けた、狙いは腹だったが、蜘蛛の素早い動きに視線がずれ、蜘蛛の右足が1本吹き飛ばされる。

『ルイズ！ よくやった！』

足が吹き飛ぶのを見たサッドは、ドワーヴン・アックスを振り下ろし、さらに傷口を広げようとするも、鎧と読んで差し支えない固い産毛に阻まれ、さほど効果を上げられず、何度も斧を叩きつけたが、わずかに出血させるだけだった。

フラワーと言えば、先ほどのルイズと同じように、腹を狙って攻撃するも、決して後ろを取られないように右に左に尻を振り、攻撃を回避する蜘蛛に、何度も空振りさせられ、いまだに一度も当たっていない。

このままではまずい、と、フラワーの焦燥は募っていった。

糸に絡め取られたセレスチャル・ドッグは、どうにか糸から脱出すると、一番槍を取れなかった汚名を返上すべく、勇敢にも蜘蛛の腹の上に飛び乗り、噛み付いた。

流石の巨大蜘蛛も腹を食い破られてはたまらないと、犬を落とすべく、身をよじる。が、犬は落ちない。

サッドもフラワーも、蜘蛛が犬に気をとられてるのを察知して、再度雄叫びをあげながら、攻撃した。

フラワーの鈍器が右足の一部を叩き潰し、サッドの斧が左足後端の一本を付け根から切り落とすのに成功すると、ルイズは「サッド、フラワー、離れて！」と杖を掲げた。

その声に気づいたサッドとフラワーは蜘蛛からぱつと離れた、直後、ルイズの呪文が再度炸裂し、左足前端が吹き飛んだ。

痛い、痛い、痛い。

私はお腹いっぱい餌を食べ、卵を産みただけなのに、なんでそれを邪魔するのか。

彼女は、すでに巣立った自分の子供たちを呼び寄せるべく、ひときわ甲高い、怒りと痛みの声を上げた。

純然たる生存競争を勝ち抜き、生を謳歌するために。

雪風の中、ビュイイイイと母の哀歌がコルソス島に響き渡った。

敗走

ジーツは気色ばんで叫んだ

「逃げる！」

その叫びもむなしく、一匹のサファグンの指先から2条の紫光がふわりと、飛んできて、ダクスの背中を貫いた。ダクスが吐血して崩折れ、ジャコビーに取りすがる。だがジャコビーは悲鳴をあげてダクスを突き飛ばし、才人達が入ってきた扉へ、後ろを顧みることなく逃げ出した。

「おい、待てよ！ ジャコビー！」

才人が逃げるジャコビーの背中へ怒鳴りつけたが、彼は悲鳴の残響を残しつつ、あっという間に消えてしまった。右往左往していた他の囚人たちも、彼に続いて慌ててその後をついてゆく。

「ダクスさん！」

うつ伏せで倒れ伏すダクスを才人は抱き起こした。吐血により胸を真っ赤にしたダクスに、生気は感じられない。瞳孔は開ききっており、体を揺らす才人に一切反応せず、体は完全に弛緩しきっている。彼は明らかに死んでいた。

「そんな……」

呆気無く死んだ男を目の前にして、才人は呆ける間もなく、誰かに腕を掴まれた。才人の腕をつかんだのはウルビアンだった。

「お前はとりあえず逃げろ。だが逃げすぎるなよ、逃げた先で襲われても手助けできないからな」

ウルビアン言うとおりだった。呪文の加護のない、今の才人は普通の高校生に過ぎない。

「これは借りておくぞ」

才人の足元に転がっていた棍棒を拾ったエルフは、ジーツとセリマスの戦列に加わるべく、才人に背を向けた。

「ウルビアン、気をつけて」

「ああ、またあとで会おう」

後ろ髪を惹かれる思いで、才人はその場から逃げだした。

敵の魔法を避けたと思ったら、後ろの商人が死んでいた。もったいない。実にもったいない。救出料をせびり取るはずだったのに。

かといって、ジーツには敵の魔法に当たってやる気はサラサラなかった。死んだ商人とは『敵の魔法にわざと当たっても依頼人の命を守れ』等といった契約をしてないからである。当然の話だった。

仕方がない、あとで体を漁ってみるか……でも、あいつ生簀に浮いてたから金なんて持っていないだろうなー、と、詮無い事を考えながら、首の皮一枚で、敵の槍による突きをバク転でよけた。ちよつと

後ろに下がったせいで、セリマスが3匹を相手取ることになってしまっている。盾を構え、ここから先へと通すまじと、ぬかるむ地面で必死に踏ん張っていた。

「ちょっとジーツ、手伝いなさいよ！」

セリマスの悲鳴のような怒号と、盾を殴りつける連続した金属音が洞窟内部に響き渡る。

本来なら、タルブロンが敵の雑兵達を足止めをするべきなのだが、火力の高い敵の妖術師が2匹もいるので、そこらは彼が惹きつけざるを得なかった。酸、レジスト・エナジー電気に対する抵抗と夜の盾の呪文で、サファグンの妖術師達から放たれた紫電の矢や魔法の矢を次々に受け止めている。敵の呪文攻撃の累積と時間経過でいずれは突破されるだろうが、高い火力を持った呪文の使い手から潰すという戦闘の鉄則通り、敵の妖術師を倒すべく、すでにタルブロンは呪文を唱えていた。

……こんなところで虎の子は使いたくなかったなあ、と、ボヤきながら、ジーツは懷から手榴弾を取り出した。

創世神話に出てくる、天空の竜たるシベイの水晶片と火の精霊の魂の欠片を組み合わせた代物だ。これらの創作罫は都会の技術のある工房や、悪党どもの吹き溜まりでしか作れない。コルスス村では到底作り出せない物で、なまなかには補給できない代物だった。

「セリマス、下がれ！」

言うが早いか、ジーツは手榴弾を投げつけた。巻き込まれないように、セリマスは盾をかまえつつ後ろに飛びすさった。と、同時に敵は前進する。サファグンは体に投げつけられた石ころを、悪あが

きの産物とみたのか、一顧だにしなかった。

100年に渡った最終戦争は、精霊捕縛技術により、進化した武器とその威力で、参戦国全てに凄惨な被害を与えた事を、海の底に住まう彼らは知らなかった。だから、投げ込まれた石ころが、己の足元で炸裂して、炎を吹出すなど想像もしていなかった。

石槍をもったサファグンの前衛3匹はがくりと膝を折り、荒い息をついている。奥にいた妖術師2匹は絶命したのか、ぴくりとも動かない。

そこへタルブロン呪文が完成して、追加の火球が投げ込まれた。

荒れ狂う炎の津波を前にして、サファグンの前衛たちはついに力尽きた。が、奥に目を凝らすと、体のあちこちに焦げ目をつくりつつ、油断無く、こちらとの距離を保っている戦士階級と思しき6匹がいた。彼等はさらに奥にいるピンク色の皮膚を持つサファグンを守るかのように半月陣を描いている。

そのピンクのサファグンは杖を振るい、高い声で、何らかの命令を発した。おそらくはメス、いや巫女なのだろうとタルブロンはあたりをつけた。

戦士たちは武器を構え、こちらに迫ってくる。

「俺も手伝おう」

声の主は、棍棒をもったエルフで、サイトが助けた男だった。セリマスとジーツ達の戦列に加わり、棍棒を巧みに振り回し始めた。

「感謝する」

タルブロンは、敵の足止めをするべく、蜘蛛の巣の呪文を詠唱し始めた。その時、セリマスが叫んだ。

「7秒、稼いで！」

全てが激動的に動き、また、判断される戦闘において、7秒というのは永劫に等しい。だが、タルブロン^の呪文は、功を奏し、6匹全員が蜘蛛の巣にかかった。

セリマスは中空の葦を握りこみながら、全体援護^{エイド・マス}をかけた。この呪文には、複数の人間に、一時的に体力の向上を促す効果がある。

呪文の加護を得た、ジーツとウルビアンは糸に囚われ、もがくサファグンを殺すべく武器を振り上げた。セリマスは続いて、祝福^{ブレス}の呪文をかけるべく、小さいうそくを取り出した時に、サファグンの巫女の呪文が完成した。

ジーツ、セリマス、ウルビアンは自分たちの精神に、神性の力が入り込んでくるのを感じた。ただひたすらに膝を折って、目の前にいる存在に平伏したくなる！

ジーツとウルビアンは力に抗しきれず、熱烈に地面を掻き抱く。

「くそ、なんだこれ！」

「ダメだ、体が！」

魔法に高い抵抗力を持ったセリマスですら、半ば膝を折っている。セリマスは目の前にいる、海神に仕える巫女が、自分と同じか、或

いはより上位の位階の持主だとはつきりと理解した。彼女が唱えた
グレイター・コマンド
呪文は偉大なる命令、効果は自分がまさに今体験している通り！

まずい、これはまずいと、セリマスは神性の力に抵抗しながら、
必死で打開策を考えた。巫女が次に唱えるであろう呪文がわかって
しまう。わかってしまっただけにセリマスは悲痛な声をあげた。

「タルブロン、逃げて！」

セリマスが悲痛な声で自分の名前を呼んでいる。目の前の敵が油
断のならない実力の持ち主なのだということは、痛いほど理解でき
た。

タルブロンは、加速の呪文の詠唱を破棄して、ボール・ライトニング雷球の呪文を詠唱
しようとした。この呪文であれば、蜘蛛の巣にかかっているサファ
グンと巫女共々、まとめてなぎ払える……はずだった。

サファグンの巫女は突然、こちらへ向かって走りだした。おそら
く彼女は、近接戦闘の訓練を受けているのだらう。彼我の前衛達が
行動不能で、動ける者が、方や戦闘訓練をつけた巫女、方や近接戦
闘は護身程度の秘術使いなら、その勝敗は自ずと明らかだった。

彼女の判断は正しい。そして、向こうの移動速度のほうが早い。

タルブロンは雷球の呪文をそのまま、唱えるべきか、これすらも
破棄して、背中で杖で抗して、ジーツ達が動ける様になるまで時間
を稼ぐべきか、はたまた、セリマスの言う通り、仲間を見捨ててで
も一時撤退すべきなのか。

ほんの僅かな一瞬、判断に悩んだ。

その隙について、走りこんできた、巫女は持っていた杖を高く掲げ、タルブロンの脳天をかち割らんと、振り下ろす。間一髪で（タルブロンに髪の毛はなかったが）避け、背負い込んでいた杖を両手に握った。

ジーツ達がうごく時間を稼がねば。

その選択が、タルブロンの最大の判断ミスとなった。

巫女はシャアアア！ とエラから生臭い呼気を吐き出し、両手に持っていた杖を己が目線まで持つてタルブロンを威嚇する。すると彼女はポイツと脇に杖を放り捨ててしまった。

杖がどのように、動き、自分に振り下ろされるか、それだけを注視していたタルブロンは、そんなフェイントにあっさりとかかってしまい、杖の行先を注視してしまった。身を振る間もなく、巫女はこちらに接近し、そつとタルブロンに触れ、わざわざ共通語で神性の力を解き放った。

スレイ・リビンゲ
「即死」

圧倒的な神性の力が体内に流し込まれ、主要機関が爆発しそんな程荒れ狂う。

タルブロンは、口から粘性のオイルを勢い良く、吐出し、地面に力なく倒れ込んだ。

「タルブロン！」

「相棒！」

セリマスとジーツの悲鳴と怒号が同時に洞窟内部に反響した。

+

ビュイイイイと蜘蛛が鳴いた。

それを境に、雪原のあちこちが、盛り上がり、こちらへ接近しはじめた。蜘蛛は仲間を呼んだのだ。

「『ヤバイぞ！ 仲間を呼ばれた、一端引くぞ！』 ルイズ、呪文のあと、逃げる！」

サツドの泡を食った声にルイズは即座に反応し、杖を振った。

「ウル・カーノ！」

発火の詠唱でありながら、爆発の威力を持つ呪文は、狙い違わず氷蜘蛛に炸裂し、緑色の体液をまき散らしながら頭を吹き飛ばした。強力な筋繊維と、それを維持する体力を持った強力な生物は、娘達の救援を待つことなく、ついに息絶えた。同時に、母の死を知った娘達が悲哀の声を上げ、母を殺した者共を喰らい、その力を手にしてやろうと集結しはじめた。

氷蜘蛛が大地に伏して動かなくなっただのを見届けたルイズは、緊張の糸が切れたのか、雪原にぺたんと座り込んでしまった。荒い息をつき、杖を持つ右手はぶるぶると震えている。

「ルイズ、急げ！」

「こ、腰が抜けて……」

サッドは舌打ちして、左の太腿にベルトで巻きつけられた革の鞘に斧を収納すると、ルイズを下から掬い上げた。

「ち、ちよつと何すんのよ！ 離しなさい！」

「村、撤退する！」

『叔父さん、急いで！』

ルイズを抱え上げたサッドは、器用にも、頭上でルイズの体勢をくると変えて、自分の進行方向とは逆向きにして立たせ、ルイズの右足だけを抱えた。

叔父の考えを察したフラワーは、鎧の背中と腰に付いているカラビナフックに盾を固定し、モーニングスターを右腰に収めると、叔父と同じようにルイズの左足を抱え、サッドと共に走りだした。

「え？ え？ 何、どうということ？」

二人の小人達に両足を抱えられ、むりやり中空に立たされたルイズは混乱した。馬車後部のガラス窓から見えるように、雪原の風景が、進むに連れて遠ざかってゆく。

『わんこ、できるだけ奴らの足を止めて！』

フラワーが、随走していたセレスチャル・ドッグに命じると、彼は、雪原へと走っていった。

セレスチャルドッグは命じられたとおり、蜘蛛達の真つ只中へと突っ込み、蜘蛛の足に噛み付いたりしているが、まったくの多勢に無勢で、美しい毛並みが、己が血に少しずつ染められていった。やがて、定められた召喚時間が過ぎたせいで、彼は光の環の中に飛び込み、紺碧シニアの空へと還っていった。

距離はいくら稼いだが、蜘蛛達はまだ多数が、ルイズ達を追っている。

「ルイズ、蜘蛛達に魔法撃つ！」

『こうなったら、アンタが頼りだよ。撃って、撃って、撃ちまくれ！』

フラワーが何と言っているのか理解できなかったが、サッドの言うとおり、今は確かに魔法を撃つべきだった。さく、さく、と雪を踏む軽やかな音が連なって、いつしかザクザクザクという刺突音に成り、今やコルス島中の氷蜘蛛達が集まったのではないかと思わせる程に、ルイズ達の後を追って来ていた。

セレスチャル・ドッグの奮闘を見たルイズは呆然としつつも、どうにか現状を理解した。

「な、何あれ、気持ち悪い！」

あの様なおぞましい生物はこの世から葬り去るべきだ。一刻も速く。嗚呼、腹立たしいことに、今だけは、ツエルプストーの火の系統が心底羨ましい。全てを炎の渦にたたき落としてしまいたい、もしくは憧れる母の様に全てを風で吹き飛ばしたい！

「くそったれ
ブリミル！」

と、貴族の淑女にあるまじき暴言を吐いて、ルイズは精神を集中した。母と姉との特訓で、集中して杖に精神力を流していけば、より威力の大きい爆発を起こす事ができると判明していた。それは詠唱する呪文の長さにも密接な関わりがあった。

母によると、戦闘を行うメイジは、精神の集中状態を段階的に高めてゆくことができ、それによって呪文の威力を増すことができるのだそうだ。無論、使用する精神力は湯水のように消費される。

母は言った。

「ルイズ、貴方に私の精神集中技法を教えましょう。これができたなら、おそらく貴方は、いつか、私以上の使い手になるでしょう」

……母の言葉に従い、ルイズは戦闘における精神集中技法を、烈風力リン直伝の技を、訓練で修めていた。

他のメイジと同じように、普通に魔法が使いたい。その願いは未だに叶っていないけれど、戦闘は別。爆発という現象ならば、私の方に一日の長がある。

ルイズは母の教えを思い出していた。

——心を静かにして、何も聞こえなくなるまで精神を研ぎ澄まさない。それが瞬時に行えるなら、貴方はもはや一流の戦闘メイジですよ。

耳に痛いほどの海鳴りと雪風が、いつしか途絶え、足元でサッドが何かをがなりたてても、ルイズには聞こえなかった。

「呪文威力強化」

——音が聞こえなくなったら、次は世界が色を無くすまで集中なさい。白と黒のみで構成された単純な世界。そこは、全ての動きが遅くなり、相手の致命的な隙が見えてくる。

短足の小人たちに抱えられているので。視界はひどくぶれている。まるでクッションの悪いオンポ馬車のよう。そのひどい縦揺れがすこしずつ、ゆっくりとした動きになってくる。それに付れて、視界の端から、色が消えてゆき、やがて完全にモノクロの世界に突入した。

「呪文威力最大化」

——ルイズ、準備は整った？　なら呪文を唱えなさい。貴方がこの道を行くならば、いずれは高速詠唱や呪文距離延長についても教えましょう……。

ルイズは詠唱の長い呪文を唱えた。詠唱が長ければ長いほど、威力が上がるのがわかっている。……自分は風メイジではないけれ

ど、母の様に、飛びたい。母の様な自由な風になりたい。

「イル・フル・デラ・ソル・ウィンデ」

ルイズは杖を振り下ろした。

+

ジャコビーは曲がりくねった洞窟を倒けつ転びつ、両手を子供のように振り回しながら、必死になって逃げていた。

どうしてこうなった、どうしてこうなった！

後ろから足音が聞こえてきたので、怯えつつ、後ろを振り返ると自分と同じように捕まっていた商人たちが駆けてきた。彼等も自分と同じように逃げてきたのだ。

そっだ、こんな恐ろしい場所に1秒とだっていられるか！

「ちくしょう、どうしてこんな目に合うんだ！」

再び走りだした自分の背後から、自分と同じ思いの叫びが消えてきた。

「戦争が終わって、復興して、やっと、やっとここまで来たのに！ちくしょう、ちくしょう！」

ジャコビーは、コルソス村の網元の息子として生まれ、最終戦争

を経験することもなく、従軍することもなかった。最終戦争は、コーヴェア大陸を中心とした陸戦が主体で、海はあまり関係なかったからだ。今まで何事も無く、平和に生きてきたジャコビーにとって、退屈だが平穏な日常というものは、凧の海のように愛すべきものだ。冒険者や、荒くれの水夫が語る物語という物は、聞いて楽しむものであつて、語られる苦労や恐怖を体験したいとは露にも思っていないかった。

それなのに、ある日突然、非日常の世界へ足を踏み入れることになった。

友好的だったサファグンに襲撃され、客として金を落としてゆく水夫は次々と死んでいき、村の人間は誘拐されて消えてゆく……。もう沢山だ。俺を平和な世界にかえしてくれ！

目の前に、鉄格子があり、扉は開いている。そこを走りぬけた時、後ろから悲鳴があがった。岩棚からサファグンが飛び降りてきたのだ。

ジャコビーは商人たちを迷うことなく見捨てる選択をした。見捨てるという選択すら思い浮かばず、恐怖から逃れる道を選んだ。背後から、何かが突き刺さる音、悲鳴が聞こえてきたが、それにかまわず、ジャコビーは走った。

洞窟を抜けると、相変わらずの曇天模様で、雪が降り出していた。細い下りの坂道を、息を切らしながらジャコビーは走った。途中、ジーツ達が体を休めていたキャンプを見つけた。

ジーツは火の始末をきちんとしていなかったらしく、ほのかな熾火が見える。

ジャコビーはそれらに目をやったものの、そこで立ち止まろうとは思わなかった。そのまま坂を下り、砂浜まで走った。

まるで獣のような息を吐きながら、ジャコビーは辺りを見回し、ここが島のどの辺りなのかを確かめた。生まれ育ったコルスス島だ。地形をみればすぐに分かる。目を眇めると、遠くに村の入江が見えた。ならば、ここは島の北東部の浜辺だ。ここからなら、多少海を泳げば、村へ逃げ帰ることができるだろう。

冷たい海水に慣れるために、少しずつ足を浸し、やがて意を決して、ジャコビーは水中に体を投じた。服を纏っているから泳ぐなんて事は不可能だった。だが水深の浅いこの辺りならゆっくりと歩くことはできる。水深が深くなる辺りから、服を捨て、村まで一直線に泳げばいい……。

村に逃げ帰る事しか頭にないジャコビーは、自分を取り囲む、水中の影に気がつかなかった。

水中から勢い良くサファグン達が出し、ジャコビーを取り囲んだ。

ジャコビーはすかさず、逃げようとしたが、周りを取り囲まれてることに気づいて、悲鳴を上げた。

ジャコビー・ドレクセルハンドの運命は決まった。

長い一日

……哨戒を終え、定められた陣地に帰ってきた3人の獵師を迎えたものは、群れをなし奥地へ向かう氷蜘蛛達だった。

海神に帰依する前の彼等は、太陽の光を浴び、たわわに実ったフルーツをたんと食べ、天敵といえは人間しかない茶鼠を狩ることを生業としていた。茶鼠達はでっぷりと太り、その体高は人間の腰に達する程だ。果物しか食べない彼等の肉は、仄かに甘く、美味い。

コルソス牛と称されるこの肉を食べることが、コルソス航路を行き交う水夫達の唯一の楽しみですらあったが、その肉の持ち主は、餌となる木々が立ち枯れることで激減し、いまやめつたに見ることはできなくなってしまうていた。

困ったのは獵師達も同様である。村の住民に魚以外の食料を供給できなくなるからだ。そうして彼等は、食料を求めて、島の奥地へ行き……帰って来なかった。

かつては村の為、今は仕える主と、まだ生きている同志達の為に獲物を狩っている。だが、やはり、気候の激変により、茶鼠達はその数を減らしていた。

同志達の為にうまい肉を提供してやりたいのに。

その思いが、彼等の主の心を動かしたのだろう。獵師達の脳内に、主は直接囁いた。

鼠の肉が食えなくなったら、蜘蛛の肉を食べればいいじゃない、と。

脳内に直接囁かれた獵師たちは、「はい、仰せのままに」と主に囁き返すと、蜘蛛達を狩るべく、その後をつけていった。

十

コボルド達と、蠢く死者を含むカルティスト達は、洞窟の入り口で互いに睨み合っていた。

ウェブスターら術者達は疲れ切っており、もう1、2回くらいしか呪文をかけられないだろう。こうなった以上、尻尾をまくって逃げるしかない。だがそのタイミングが掴めなかった。今まで散々痛めつけてきたので、敵対しているカルティスト達に、油断というものは存在しない。

下手にがつぷりと四つに組んでしまったものだから、簡単には逃げさせてもらえないだろう。

ディックは自分の判断ミスを認めざるを得なかった。

すでに術者2人には合図を待てと伝えてある。合図があれば加速の呪文で、一目散に逃げる。無論、敵の矢玉を避けるために、新年の酔っ払いの様にクネクネと逃げねばならない。

互いに睨み合い、緊張の糸がきれようとしていたその時、北西から派手な爆発音が聞こえてきた。

丁度サッド達のキャンプがある方向からだった。爆発音は、洞窟入り口の浅い所ですら反響し、4万年の長きに渡って水滴が穿った、わずかな吹き抜けから上方へと抜けていった。

「報告！」

ディックは眼前敵から目を逸らすわけにはいかなかったので、部下に報告を求めた。

「ルイズの魔法のようです」

ちらりと背後を確認したらしい誰かが、ディックに向かって叫ぶ。

話に聞いた、失敗魔法だろう。キャンプからここまで聞こえるような爆発だ。目の前にいる死人達にぶちかまして、今度こそ、こいつらを死の領域^{ドルラー}へとたたき落としてもらいたいものだ……。

ほんの僅かなものの思いに囚われた時、ディックは、空気が微かに揺れた気がした。その揺れは少しずつ増幅し、やがて、その場に生きる生きている者達全員が気がついた。

深い雪山に住まう者なら、一度は経験するその振動。

カルティストの連中には、そういった場所に住んだ経験のある者

はいなかったのだろう。誰も彼もが怪訝そうに辺りを伺うだけで、行動を起こそうとはしない。特にディック達を苦しめた、地の利に通じている、村の洗脳された獵師達が、ぽかんと呆けていたのも無理はない。赤道付近に住まう彼等は、嘆ヶ峰の万年雪を見たことはあっても、雪崩を経験した事などなかったのだから。

ほぼ垂直に落ちてくる雪津波を指差し、叫ぶ彼等は、あまりに突発的な事態に慌てふためき、眼前の敵のことなど忘れ去ってしまっていた。

「今だ！ 逃げるぞ！」

ディックのその言葉に、術者達は最後の氣力を振り絞って、加速^{ヘイスト}の呪文を唱えた。

白鱗のコボルド達はその場を離脱して、5秒もしないうちに、嘆ヶ峰の入り口は、轟音と膨大な雪で閉ざされた。

十

とにかく武器となる物を探そう。

才人は、辺りを見回した。視線の先には、岩のくぼみに据えられた松明がある。だが、これだけでは心許ない。まだ他にないかと再度見回すと、両手の平を合わせたぐらいの石が転がっていた。

才人は己の履いているジーンズからベルトを抜くと、石に巻きつけ、バックルできつく結びつけた。

呪文の加護もなく、さほど筋力のない才人では、ナイフとか小剣を持つても戦力にはならない。だがこれなら、物理の授業で習った遠心力で、少しは打撃を与えられるかもしれない。問題はこれを敵に命中させる戦闘技能であつたが、こつそり敵に近づいて後頭部に浴びせるくらいなら、たぶん、なんとかなるだろう。半魚人が蹲ってくれたらラッキーだ。戦闘不能になるまで腹をけるなり、テレビでやってる格闘技みたいにマウントをとって、殴りつければいい。

では止めは？

才人は、その事については考えないことにした。自分が命を奪うことについては、まだ、深く考えたくなかった。

とにかく戦闘不能にして、本職に任せればいいや。タルブロンも言っていたじゃないか、できるだけ戦闘に参加するなつて。もし、参加することになつても、気絶させるとか、ボコつて動けなくなるようにすれば……。

そう考えて才人は、ベルトでくりつけた石を振ってみた。おもいきり振っても、石がすっぱぬけないのを確認する。

「俺が太っていれば、もう少しベルトが長かつたのにな……」

そうひとりごちて、ベルトが滑らないようにしっかりと握りこんだ。それでもベルトの長さは20センチ近くある。手で掴んで直接

殴るよりは、打撃の力はあるはずだった。

それから才人は、海水に濡れて重くなり、動きづらくなったジーンズ脱いで、捻り、吸い込んだ海水を吐かせた。そうでもないと思えずきた。

パンツも同様だ。

湿ったパンツとジーンズを再び履いて、その不愉快な感触に顔をしかめながら、今度はお気に入りのパーカーを脱いで、左手に巻きつけた。

もし、相手が攻撃してきたとき、少しでも盾みたいになればと考えたからだだったが、パーカーなしでは、氷に閉ざされたこのコルソスではあまりに寒すぎた。

洞窟の入り口に吹きこんでくる風に、体が余計に冷やされる。

少しでも暖を取りたいと、考えた才人は深く考えることなく、左手で松明を手にとった。松明には、油を多分に染みこませた布が巻きつけてある。結わえていた紐が焼けたのか、或いは半端に巻きつけられていたのか、才人が手に取っただけで、ぼろっと落ち、化学繊維で作られていて、極めて燃えやすいパーカーの左袖に落ちた。

「熱！ やつべ、燃える！」

途中でずり落ちたりしないように、きつく結びつけていたのだからたまらない。

才人の左手はあつという間に燃え上がった。

消すには大量の水をかけるしかない。洞窟のちょっと先まで走れば、大量に海水が流れこんでいる場所があったはずだ。

激しく燃え上がり、痛みを感じ始めた左手をふりまわして、油布を落とそうとした。が、その矢先に、前方から商人たちの断末魔が聞こえてきた。間髪置かずに、後方からもタルブロンの名を叫ぶ、ジーツとセリマスの怒号と悲鳴がこだまする。

彼等が窮地に陥っているなら、このまま敵にこの火をなすりつければいい……では、どちらの敵へ？

才人は、一瞬だけ迷って、ジーツ達の方へ走りだした。

十

ルイズは眩しさと、強い爆風で杖を落としそうになった。

精神力を込めに込め、全力全開で解き放ったことなど、実は数えるほどしか無い。それはメイジなら誰だってできる簡単な事だから。だからこそルイズは、より制御の難しい、最小威力で解き放つ訓練をしてきたのだった。

目の前の爆風が晴れて、露になった光景は、内蔵と八肢をまき散らした氷蜘蛛達の死体だった。慈悲というものを知らない子供が握りつぶした様な、その有様が、潮風とざっと見て10匹分の内蔵を

和えた、酸臭が、雪風と共にルイズ達の眼に飛び込んでくる。

ルイズは、肩を喘がせながら、マントで口と鼻を覆った。臭いと、自分の魔法がもたらした出来事に、吐きたい気分だった。だがこんな所でのんびり吐いてるわけにはいかない。仲間の死体を文字通り踏み越えて、まだ20匹程の蜘蛛たちがこちらへ迫ってきていた。

小人たちの無茶苦茶な運搬で、ひどく視界が揺れる中、ルイズは呼吸を整え、自分の精神力がどれほどあるかを確認した。

……最大威力であと3発、中程度の威力であと4発、小爆発で9発は撃てるだろう。

たったこれだけの弾数で蜘蛛を屠らなければならない。あまりの心細さに、「ちい姉様助けて……」とか細い声で呟いた。

その呟きと共に、フラワーが着込んでいる鎧の草摺の左側を、何かがかすていった。

金属音と共に弾かれたそれは雪面にぽとりと落ちた。

矢だった。

『ちきしょう、敵の偵察だ!』

「ルイズ! 前、敵、爆発させる!」

サッド達は叫ぶが早いか、短い手を器用に操り、ルイズの体勢を再び入れ替えた。ぐるりと視界が時計回りに回って、進行方向である前方を見せられると、トリステイン魔法学院の石塔を横倒しにした様な橋が、谷にかかっている――あとになって知ったことだが、

その石柱は古代巨人文明の遺跡だった——その橋の向こう側は高い丘になっていて、こちらを弓矢で狙う男達がかすかに3人ほど見える。

武装したとはいえ、人間を目の前にして、ルイズは一瞬戸惑ってしまった。

あんな大きい蜘蛛ですらバラバラになってしまふのに、自分の呪文を彼等に向けたら……

漂う臭いと、想起した光景が重なり、ルイズはたまらず、体を丸めてえづいてしまった。

単なる偶然であつたが、その偶然がルイズを救った。

体を丸めた瞬間に、矢が通りすぎていった。

サッド達は肝を冷やした。どんなに視線を巡らせても、遮蔽物となるものは何も無い。

後方からは蜘蛛の群れ、前方からは弓手。

八方塞がりだった。

『キャンプに行くときは見かけなかったわよ、あんな奴ら！』

『たまたま偵察隊に出つくわさなかったんだろっさ！』ルイズ、速く、魔法撃って！

サッドの怒声に、ルイズは俯いたまま、「無理！ 撃てない！」と叫び返した。

「人に魔法を撃つなんて、無理！」

そうして会話している間にも矢はびゅんびゅんと飛んでくる。まだ若干の距離と雪風による視界の悪さが、サッド達の救いとなった。火酒を飲み過ぎたせいで、柱をミノタウロスのどてっ腹と勘違いして突撃するドワーフの様に、蛇行しながら矢を避け続けた。だが、敵も然る者、二の矢、三の矢ともなれば、少しずつ狙いが修正されてゆく。

「ルイズ、魔法を！」

「だから人には無理だって！」

「当てなくていい！」

当てなくていい。それを聞いたルイズは、ほっとした。

そうだ。当てなくても、彼等がひるんで逃げだしたりしてくれればいいんだ。

己が精神を立て直したルイズは、呪文を唱えようとして、それが不可能な事に気づいた。

遠すぎる。呪文が届かない。

「サッド、もっと近づかないと呪文が届かない！」

「隠れるところ無い。地面撃って、土の煙、隠れて近づく！」

サッドに言われたとおり、ルイズは精神を集中させ、威力を上げるように呪文を修正しつつ、杖を振り下ろした。

「イル・フル・デラ・ソル・ウィンデ！」

呪文は、石橋の向こう側の袂で炸裂し、雪と土をもつもと巻き上げた。だが、それでも、矢は飛んでくる。

今度は、フラワーの右の草摺に矢がかすめた。それでも巻き上がった土と雪を煙幕にして、サッド達は接敵するほかない。

石橋の中央までどうにか接近し、もう一発と、ルイズがそう考えたときに、前方から、男の断末魔が聞こえてきた。同時に、『右だ、異教徒がいる！』と敵の胸間声が聞こえてきた。無論、共通語の叫びはルイズにはわからなかった。

「ルイズ！」

サッドがルイズを呼んだ。何をすればいいか、ルイズにはもうわかっていた。

「イル・フル・デラ・ソル・ウィンデ！」

今度の呪文は、小高い丘に陣取っていた男達の間近で炸裂し、丘の一部が崩壊した。別の敵に氣をとられていた彼等は、崩壊に巻き込まれ、丘の麓まで転がり落ちてくる。

転がり落ちてきた男達は悲鳴をあげつつ、そのまま垂直に落下して、地面にたたきつけられ、動かなくなった。

麓の影から、白いフード付きのマントを纏った一人の若い男が走り寄ってきて、小剣を抜き、男達に喉に止めをさしていった。

全てが終わった頃に、ルイズ達はようやく橋を渡り終わった。

『サッド！ 後ろだ！』

男の声に反応し、サッドはルイズに言った。

「ルイズ、橋を落として！」

「これで呪文は最後よ！」

ルイズは、三度精神を集中して、呪文を解き放った。

その場にいる者たちの視界を閃光が充滿する。4万年に渡って耐えてきた、巨人文明の礎石は爆音と共に崩壊し、巨岩は橋を渡っていた蜘蛛達も道連れにして、谷底へと落ちていった。

その光景を満足気に見ながら、ルイズは意識を手放した。

+

口からオイルと、内部機関の破片を盛大に吐き出しながら、タルブロンはまだ生きていた。

サファグンの巫女の魔法に、運良く抵抗できたらしい。

巫女が唱えた呪文は、精神ではなく、肉体に働きかける呪文だった。精神に働きかける呪文であれば、ウォー・フォージド戦闘機械であり、秘術使いという特性上、抵抗は容易い物だったのだが、あの巫女はそれを知っていたのだろうか？

血反吐ならぬオイルを吐き捨てながらも、まだ必死に頭を働かせて、タルブロンは己が生存する術を模索し続けた。

ジーツが必死に自分を呼んでいる。

セリマスが癒しの術をかけようとしている。

生身ではない戦闘機械の自分には、癒しの術は通常の半分程度の効力しかない。その為、多くのウォーフォージド達ヒールズ・フレンズが友の癒しという改造をうけてきた。少しでも癒しの呪文の通りを良くするために、木を初めとする生体部品を活用してきた。自分も同様である、が、如何せん、自分とセリマスはいささか距離がはなれている。癒しの呪文が通るかわからない。

それに、呪文をかけはじめた敵のクレリックを、サファグンの巫女が見逃してくれるとは、とうてい思えなかった。

巫女はまず自分のトドメを刺すことにしたようだ。捨てた杖を拾って、自分の頭をかち割らんと接近してくる。

巫女の攻撃を避けながら、リペア修復の呪文で自分を修復、と、いうのはいささか無理がある。ならば……

サファグンの巫女が杖を振り上げたとき、タルブロンは思い切つて、足払いを仕掛けてみた。

だが、体術の心得のない秘術使いの足払い等、巫女にとってはエラをほじりながらも避けられる。巫女は必死にあかくタルブロンに面白みを感じたらしく、杖で突付きはじめた。

杖から逃れるためにタルブロンは必死に身をよじる。其れを見て、巫女は指さしてゲツゲツゲと笑い出した。

その笑いが唐突に止まったのは、巫女が後頭部をぶん殴られてからだだった。突然の痛みに驚いた巫女が見たのは、貧弱な体で左手に炎を宿し、石を振り回す奇っ怪な人間の子供だった。

才人が見たのは、口からオイルを吹出し、地面をのたうちまわるタルブロンだった。

ピンクの鱗を持つサファグンが、杖でタルブロンを突付き回しておもしろがっている。

その光景に才人は、心臓を直接殴られた様な衝撃を受けた。

おいおい……お前、何してくれてんだよ。その人死んじゃったら、俺、どうやって地球に帰ればいいんだよ……！

「ふざけるなよ……！」

才人は、怒りが視界が真っ赤になったような感覚に襲われた。

右手に握りこまれた革ベルトがぶるぶると震える。

左手は才人の怒気に反応したかのように燃え盛る。

止めをどうするとか、どうでもいい。今はただ、こいつをぶん殴りてえ！

才人は己の怒りに突き動かされて、サファグンの巫女に気付かれぬ様、静かに歩み寄り、遠心力により加速された石で思い切り殴ったのだった。

才人は、タルブロンをいたぶっていた巫女を、もう一度ぶん殴るべく、ベルトをふりあげて巫女の脳天に振り下ろした。が、最初の衝撃でベルトが緩んでいたのか、石はそのまますっばけてしまい、ジーツの方へ飛んでいった。

「危ねえだろバカ！」

飛んできた石をかるうじて避けたジーツは才人を大声で罵った。

石はそのまま、ジーツを槍で突き殺そうとしていたサファグンの柔らかな腹に当たり、彼はそのまま蹲ってしまった。

それを見たジーツ達は、サファグンだけでなく、自分達も呪文の効力が切れている事に漸く気づいた。タルブロンを気にかけるあまりの、プロにあるまじき失態だった。ある意味、タルブロンが殺されそうになったことが、それだけ衝撃的だったといえるかもしれない。

ジーツは懷から、修復の杖を素早く取り出し、杖に込められた魔力を解放した。解放された杖の魔力はタルブロンに巻きつき、死の呪文により破壊された部位を修復してゆく。

ついでに、才人が相手取っている巫女にも、お礼参りの投^{予告}げナイフを渾身の力と技量を込めて、送付しておいた。

セリマスがタルブロンに駆け寄っていったので、相棒の世話はセリマスにまかして、ジーツは両腰の小剣を抜いた。

相棒を傷めつけられた礼をしてやらねば気が済まない。

ジーツはサファグンの群れの真っ只中に飛び込んでいった。

ウルビアンは地面に落としていた棍棒を手に取り、サファグンと相対した。

まずは才人の予期しない投擲に蹲ったサファグンを、下から棍棒を掬い上げ、顎を粉碎する。下顎をぐしゃぐしゃにされたサファグ

ンは、そのまま後ろにひっくり返り、ビクンビクンと痙攣し、やがて動かなくなつた。

さあ、次だと構えをとつた所に、嵐の様な勢いで群れに飛び込み、竜巻のような勢いで二振りの小剣を振るいはじめたハーフリングにぎよつとしたものの、斥候たる者としての平常心を発揮して、ウルビアンは淡々と戦闘をこなしていった。

ハーフリングの牙え渡る技量を脇目に見ながら、ウルビアンはジーツ・シミスという名を脳裏に刻みこんだ。

この島を生きて出られたら、彼の名を照合してみよう、と。

セリマスは体が動くことを確認すると、タルブロンを救出すべく、彼のところまで走り寄つた。幸い、巫女は才人が相手取っている。すぐにも彼を手助けするべきだったが敵の救援がこないとも限らない。まずはこの場のいる者たちが生き残るには、秘術使いの呪文の加護はかせない。そう判断して、タルブロンに癒しの呪文を賭けた。

「……お嬢様、助かりました」

「礼なんていいわ。家族ですもの」

さあ、エラ娘をぶん殴りにいきましょつと、怒りの炎を瞳に宿し、タルブロンが立ち上がるのに手を貸した。

才人はバツクルの金具でも巫女を攻撃できると判断し、右手でベルトを振り回しながら突進した。巫女は手に持っていた杖で、こち

らへ飛んでくるバックルを上手に巻き取ること、才人からベルトを奪い取り、そのまま、流れるような動作で杖の尖った部分を才人に突き出した。

才人はどうにかその突きを、右にステップを踏むことで避け、相手の腰にむけて、低い体勢で突進した。

巫女は杖を突き出した体勢だったので、才人の突進を止めることができなかった。が、こんな細い子供の突進等、自分の重量を載せた尻尾を振り回せば、叩き落せると判断し、一回転しようと腰をひねる。

だがそれは、ジーツの渾身の予告状が、右の脇腹に刺さったことで永久にかなわなかった。

光の届かぬ深海で、怪しく煌く宝石サンゴの様な鱗を自慢にしていた巫女は、自分を傷つけた存在に怒り狂い、送り主を睨みつける。その刹那、突進した才人は巫女を岩棚の壁際まで突き飛ばすのに成功した。

後頭部を打ち付け、杖を取り落とし、痛みを叫ぶ巫女の口の中に、燃え盛る左手を才人は突き入れた。興奮してアドレナリンが大量に分泌しているのか、才人は痛みというものをまるで感じていなかった。

「ふざけんなよテメエ！」

口の中で燃え盛る炎に、巫女は悲鳴をあげ、激しく暴れ、太い腕で才人を殴りつける。才人も負けじと巫女の顔面を右手で何度も殴りつけた。それでも彼女は必死に抵抗し、口の中の痛みをこらえて、

左手を噛み千切らんと、鋭い歯の生えている口を閉ざす。流石にたまらず、才人も悲鳴を上げた。だが、その痛みは才人の怒りを余計に増幅させるだけだった。

巫女の脇腹にジーツの投げナイフが刺さっているのを見つけた才人は、それを取るためになんとしても隙を創りださねばならなかった。

左手を食わせたまま、頭突きをかまし、膝で腹に蹴りをいれ、もう一度右手で顔を殴った。その攻撃に流血し、顔面を真っ赤に染めた巫女は意識が遠くなったのか、ほんの僅かに呆然とした。生まれた僅かな隙に、才人は右手でナイフを抜いた。途端に腹からも流血し、巫女は絶叫した。

才人は先ほど蹴りをいれたことで、腹部が柔らかいことに気づいていた。

怒りに突き動かされている才人は、もはや、ためらわなかった。

渾身の力を込めて、体ごとぶつけるように、才人はナイフを腹に突き立てた。耳元で巫女の絶叫があがり、その喧しさに、余計に怒りが増幅される。

「頼むから！」

才人は抜いて、もう一度刺しこんだ。再び耳元で大音声の悲鳴があがる。

「頼むから！」

さらにもう一度。

「もついい加減、死んでくれよおお!!」

今度の刺突は、差し込んだ後、内蔵にダメージを与えるべくナイフを捻ることを忘れなかった。

深海の巫女の最後は、ひどく呆気無いものだった。

かはつと吐息をもらし、ぱたりと動かなくなり、やがて静かに吐血した。才人が刺した腹部からも血がとめどなく溢れ出る。

巫女が死んだのを確認した才人は、憑き物が落ちたかのように、怒りが消え失せ、力なく、からんと、ナイフを落として、やがては肩を震わせて泣き出した。

才人を援護し、巫女に一撃を与えんと近づいていたセリマスは、才人に近寄ると、彼女の信仰する銀炎神の力を借りて、才人の傷を癒し、静かに抱きしめた。

柔らかな人の温もりを感じた才人は、ついに声をあげて泣きだした。

自分たちが先程出会した雪崩の様に、落ちてゆく氷蜘蛛達を見ながら、ディックは、どのルートで村へ到達するべきかを考えていた。谷の向こう側では、サッド達がこちらへ気づいたのか、手をふっている。

こちらも手を振り返すと、谷底の方から、ゲ、ギイ、ギヤースと聞き覚えのある奇声が聞こえてきた。

ディックが谷底を覗き込むと、カニス氏族が構築するも、後に放棄された、荒廃した水路に瓦礫と蜘蛛の死体が重なっているのが見えた。そこへ一匹の氷小魔^{アイス・メフイット}が、羽をばたつかせて、ギヤーギヤーとわめきながら、もう一匹の氷小魔に指示している。指示された一匹はかろうじて生き残った氷蜘蛛達^{マジック・アロー}に魔法の矢を放って止めをさしていた。

「長、あれはジーアではありませんか？」

ブルの声に眼を凝らすと確かに、奥様のペットであるジーアであった。

氷蜘蛛シシックと違って、比較的話の通じるジーアを筆頭とする氷小魔達とコボルト達は、仲が良い。

数少ない餌を取り合うときは魔法なし、己の拳で決着をつける……と、言いつつこっそり魔法を使って、それが互いにバレて殴り合ったりもする程で、大祭日の期間では、フェスティバル・コインだけでなく、互いに奥様の部屋から盗んだプレゼントを交換しあう仲なのだ。

ある、大祭日の夜に、コボルド達は氷小魔に、オージルシークス
の靴下を耳飾りとしてプレゼントしたところ、彼らは喜んで長い笹
穂のような両耳にはめた。くるりと回って、ギヤアアスと断末魔
のようなしわがれ声と鬼瓦の様な顔で可愛さをアピールする。

氷小魔達はお返しに、コボルド達にヘアピンをプレゼントしてく
れた。髪の毛のないコボルド達は使い方がわからなかったので、氷
小魔達に聞いたところ、頭に刺すのだと、身振り手振りで答えが返
ってきた。ディック達は迷うことなく、脳天にブスリと垂直に挿し、
だらだらと流血させつつ、斬新なファッションを教えてくれた氷小
魔に感謝するのだった。

無論、そのささやかなプレゼント交換会は、自室への侵入者を感じ
知したオージルシークスの乱入によって見るも無残な大失敗となっ
てしまったのだが。

「確かにジーアだな。おーい、ジーア！」

谷底は、水路による放水音で聞こえにくいはずなのだが、隘路で
音が反響したのか、どうにかジーアにも聞こえたようだ。

谷の上にいるディック達に気づいたのか、グイ、ギャー、グアー
と挨拶をかえしてきた。

ディックは術師達に「フェザー・フォール羽毛降下の呪文は残っているか？」と問い
ただすと、是と答えが返ってきた。

さっそく、呪文を使い、全身を羽毛に包まれながら谷底へ降下す
ると、ほんの数秒で、彼等は厚く氷の張った水路に降り立つこと

ができた。

「ジーア、息災か？」

と、ディックが尋ねると、ジーアは頬袋をふくらませ、唾を貯めこみ、クジュグジュと音を立ててからペツと外に吐き出した。最上級の敬意を払った肯定の意だ。

「お前は何故ここに？」

ゲエ、キガー、ギョームと癪に障る鳴き声と身振り手振りで、ジーアはどうかコボルド達に現状とその不満を訴えた。

曰く、

- 1 . 快適な寢床ではない。
- 2 . エサが今までより少ない。
- 3 . 侵入者は殺せといわれたが、誰も来なくて暇すぎる。
- 4 . 魚人間を見かけたので魔法をぶっぱなしたが、仲間撃ちするなと怒らりた。
- 5 . エサが今までより少ない。
- 7 . この奥に人間の女を取っ捕まえている。殺して食おうとしたら怒らりた。
- 8 . エサが今までより少ない。

と、番号が抜けていたり、内容の重複があったりしつつも、詳しい状況を教えてくれた。いずれもオーシルシークス奥様の命令だという。

「そこの蜘蛛の死肉でしばらくは凌げるか？」

と聞けば、可能だと唾を吐かれた。

「ジーア、オージロス様によると今の奥様は正気ではないらしい。村の人間共と協力して、洗脳されているという脳たりん共を叩き伏せて、奥様とお前を連れ帰る。それから、村の近くまで運んでくれるか？ すまんが、その後はしばらくはここで待機していてくれ」

ディックの言葉に、ギャボーと、悲嘆のホバリングを始めた。

「頼むよ、ジーア」

ディックがジーアの肩を叩くと、彼は首をかしげて、だらーっと細く、長く唾を垂らした。仕方ない、妥協してやるという意味だった。

十

サッドは先ほどの戦いで側面から援護してくれた青年と話をしている。白いフード付きのマントを纏っている彼は、海の男らしい広い肩幅を持ち、体型は見事な逆三角形を描いている。精悍な顔つきだが、表情は疲れきっていて、潮風を浴びた長い赤毛は汗と雪で額に張り付き、青年はうざったそうに何度も後ろへ払っていた。

彼の名はガンナー・バウアーソンといい、コルソス島の唯一の宿屋である波高亭の主、シグモンド・バウアーソンの息子であった。

『ガンナー、リピクロを下ろしていいぞ、あのコボルド達は味方だ』
『味方？ あのコボ助共が？』

サッドは頷いて話を続けた。

『ああ、白竜の部下なのは間違いないんだが、あの白竜は正気を失っているらしい。主オージロスの命令で、嫁のオージルシークスの正気を取り戻しに来たと言っていたな』
『……何故味方だと言える？』

眦をあげて、サッドを睨みつけるその目は、信用できないと、無言で主張していた。この3ヶ月の彼の苦闘を考えれば、彼がそのような態度を取るのも無理はないとサッドは思った。

『ルイズをご丁寧に護衛していたからさ。何より、あいつら今日アルゴネッセンから飛んできたばかりだからな。詳しいことは親父さんに聞け』

『親父に？ ……ルイズつてのは、この別嬪の嬢ちゃんか？』

『別嬪つて、やだ、私ホストに仕えるクレ』

『お前じゃない』

発言を遮って、顔を見ることなく吐き捨てたガンナーに、フラワ―はしょぼんと項垂れた。場を和ませようとしただけだったのだが。

『そうだ。俺たちはルイズを伴って村に帰還する。戦闘に次ぐ戦闘で今日は流石に草臥れたわい』

首をこきこきと鳴らしながらサッドはガンナーに答えた。それだけでなく、疑い深いガンナーに、辟易とした表情がありありと伺え

た。

『この娘が洗脳されてない保証は？』

『わしらと共に戦ったじゃないか。それだけでは足らんのか？』

『……冒険者としてのあんたを信用するよ』

『……万が一、この娘が洗脳されていたら、ワシが責任をとる。何、
こんだけ細っこい娘っ子なんざ、斧の一振りであの世行きさ』

恐ろしい会話が両者で交わされていることも知らず、フラワーに
おぶられているルイズは、背中で眠り続けていた。

巨人族が拵えた巨大な円柱がいくつも倒れていてる道を、サッド
達は、警戒しながら歩いていった。気絶しているルイズをフラワーが
おぶっているのも、戦力は実質、たったの二人である。だから、柱
の陰からの不意打ちを恐れていた。

もうすぐ左手の山間にハウス・カニスカニス・氏族が放棄したウォーフォージ
ドの補修部品の生産工場がみえてくるはずだ。

工場は、嘆ヶ峰から流れ出る水を大量に消費するために、巨人文
明の遺跡を流用していて、ピラミッドの様に積まれた巨岩の上に立
てられていた。

最終戦争はスローンホールド条約の締結を持って終了したが、そ
の条約に『新たなウォーフォージドの生産の禁止』という項目があ
る。

コルソスにある工場も戦争時には、ウォーフォージドの補修部品アイディ
フィサーの生産工場として稼働していたが、戦後、雇われていた多くの秘術

技師もいなくなり、村は一気に寂れてしまった。が、捨てる神あらば拾う神ありの諺の通り、戦争後の好景気に肖るうと、海賊たちが従来のスマグラー・レスト航路に集中し、それを嫌った船主達がコルソス航路を見出した。

村が潤い始めた矢先に、この事件が起こったのは、気まぐれを愛する暗黒六帝の一族、トラヴェラー神の皮肉という外ない。
ダイク・シックス

『なあ、ガンナー、村への退路は確保してるのかい？』

フラワーがそう尋ねると、『さっきまではしていたが、今はどうだろうな？』と答えが返ってきた。一瞬怪訝そうに顔をしかめたフラワーだったが、ルイズの凄まじい爆発魔法の事に考えが至った。

『……ああ、あれだけ派手な音が響き渡れば』

『そういう事さ、ほれ、おいでなすった』

隠れるぞと、サッドが囁き、二人は柱の陰に伏せた。ガンナーの持っていた予備の白いマントで残りの3人を覆い隠す。

程なくして、白いローブに複雑な唐草模様を編みこんだ男達がやってきた。二人は手にメイスを持ち、一人は弓を携えていた。洗脳され、海神に帰依した者達だった。想像を絶する恐怖体験をしたのか、はたまた、染めたのか、全員が一樣に白髪であった。

洗脳され帰依した人間の大半は、この白いローブを着用し、頭は白髪であった。これが生きている連中の中では、下の階級である。最低階級はもちろん死人たちだ。

次に食料を補給し、偵察も行っ獵師と弓兵、その上の各隊指揮官

は秘術使いか、白ローブの神官。一番エライのは、サファゲンと決められていた。

『音がしたのは、この辺だと思っただが……』

『よく探せ!』

『言われなくても分かっている』

白マントを纏って伏せると、上手に隠れることができた。彼等はこちらに気づいておらず、背中を向けている。

ガンナーはリピクロを構えた。旧来のクロスボウと違い、箱型の木製弾倉が弓の上部にあるせいで、照星と照門がなく、近距離ではひどく狙いづらい。その代わりの速射性能は、火力の向上をもたらしたが、同時に矢玉の大量消費という欠点も孕んでいた。

左手で弓床と肩を押さえ、親指は用心鉄に、人差し指は軽く引き金に添えるだけ。呼吸を止めて、体の振動を最小限して、矢を解き放つ――

――解き放とうとした矢先に、バサ、バサ、と羽ばたく音が彼方から聞こえてきた。

空をそつと見上げると、12匹の氷小魔が雁行隊形で飛んでいる。爪足はがっちり、コボルドの肩に喰い込むように握られ、コボルドも彼等の足を握り締めていた。

『おい、あれ!』

『……主様のいつていた氷小魔? だが、なんでコボルドを?』

『待て、主様からのお言葉だ。――氷小魔とコボルドを殺せ――奴らは敵だ!』

彼等は、指で印を結ぶと、呪文を唱え始めた。うち、一人は、背中の矢筒から矢を取り出し、コボルドに向けて撃った。

矢が当たったのか、氷小魔の忌々しい喚き声が辺りに響く。

サッドはガンナーに囁いた。

『やれ』

ガンナーは矢を解き放った。狙い変わらず、呪文を唱えていた男の側頭部に一撃が入り、その男はそのままくずおれて動かなくなった。敵だ！ と、仲間に警告しようとした別の男の胸に、タン、タンと二矢が突き刺さる。その男は、一撃目で仰け反り、二撃目でぺたんと尻餅を突き、痛みを訴えて悲鳴をあげた。

『黙れ！』

と、サッドが投げ斧をとばして、男を苦痛から永遠に解き放った。

フラワーはマントからさつと飛び出し、準備していたモーニングスターで相手の左膝を狙い、初撃で半月板をたたき割った。苦痛と死の恐怖からわめく男は、矢をすばやく再装填したガンナーにより、死の領域へと速やかに送られた。

古強者の冒険者達による、殺戮劇はあつと言う間に終わった。

飛んできた矢を避けられず、ジーアの羽を矢が貫通した。ジーアの汚らしい、耳障りな声が辺りに響いた。

「ジーア、構わん、下ろせ、巢に戻って養生しろ！」

眼下を見れば、倒れた円柱の森は過ぎ去り、なだらかな下り坂になっている。ルイズを担いで登ってきた坂道だ。

雪がある程度積もっているので、オージルシークス谷のように滑りながら、村まで一気に滑り降りることができるだろう。

ジーアと彼の仲間たちは、コボルドを次々に落として去っていった。落とされたコボルド達は、着地の瞬間、膝を上手に曲げる事で、その衝撃を逃す。後は、住み慣れた谷のように足の裏を上手に使って滑るだけだ。

雪の坂道を優雅に滑り始めた彼等に、ハウス・カニスの廃工場から矢が降り注ぐ、見れば衣装はバラバラで、統一性がない。洗脳された船の船員の一部だろう。

コボルド達は、滑りながら、弓を撃ち、魔法を使い果たした術者達はスリングで石を投げる。だが、山なり弾道でとんで来る敵方の矢のほうに、若干射程が長かった。加えてこちらは高速で蛇行しながらの攻撃である。まとも当たるはずがない。

まとも当たるはずがないのが、偶然にも当たった。マラーキーの放った矢が敵の弓兵に当たった。しかもその敵は、よりにもよって、マラーキーが心底ほしがっていたリピーティングクロスボウを持っていた。

マラーキーは敵がリピクロを落とすのをしっかりと見ていた。

「リピクロ！ 俺のだ！」

と、隊をはずれて、敵へ突っ込んで行った。

「何してるんだ！ 戻れバカ！」

ラズの静止する声も聞かず、巨岩の階段の最下層にいた弓兵に突撃していった。

「ヒヤッハー、ねんがんのリピクロ、盗ったー！」

ご機嫌のマラーキーに、雨あられと矢が飛んでくる。

慌てて、巨岩に身を寄せるも今度はそこに釘付けにされ、動けない。

そこへ、命令を無視して離隊したマラーキーを引きずり戻すべく、直ぐに行動したディックが走りこんできた。

「マラーキー、無事か？」

「今の所は」

マラーキー達は動けず、後方の部下たちもチマチマと弓を放つか無い。

膠着状態に陥るのを嫌ってか、敵は攻勢をかけてきた。血でドス黒く染まった得物を手にして、14名の人間とサファグンが巨岩を降りてくる。残りの6名は彼等を援護するべく、矢を放ち、ディック達の頭を岩から出させなかった。

ディックとマラーキーは折を見て弓を放つが、せいぜい一人の肩をえぐっただけで、接敵は間近に迫っていた。

その時、二人と敵の間に猛烈なダウンバーストが発生し、敵もディック達も吹き飛ばした。

荒れ狂う雪風の中に、プラチナと見紛う程の美しい白鱗が垣間見えた。すらり伸びた首は白銀の槍のようで、溢れた呼気は、わずかに差し込んだ陽光で、ダイヤモンドダストになっていた。薄い皮膜は、氷の翼でありながら、至高の芸術品と言えた。

白竜オージルシークス。

竜語で『白き剣』を意味する、美しく、危険で、巨大な竜が降臨した。

オージルシークスは、息を吸い込んで、肺を膨らませると、猛烈な勢いでアイス・ブレスを半円状に吐き散らした。

万の剣に突き立てられた様な、絶対零度のその息は、ディック達に迫ろうとしていた敵だけでなく、さらに奥の6名の弓兵を巻き込んで凍らせた。一瞬の後に、ガラスの碎ける様な音を道連れにして、敵の全てが碎け散った。

「奥様、ディックです！ 閣下から書状を預かっております！」

コボルドの長の必死の訴えに白竜は、威厳に満ちた、だが成熟した女性の、美しい声音でディックに語りかけた。

「ディック、巨大な緑宝石、魂砕きを……イリシッドめ！」

マインド・サンダー

だが、すぐに苦しい表情を浮かべ、竜は苦痛を受けているのか、身をよじった。

——長達が食われる。

と、部下たちは思った。奥様は正気じゃない。なんとしても長を救わなくては！ ついでにマラーキーも！

「お前ら、命を捨てる。俺たちはディックの知恵にいつも助けられてきた。今度は俺たちが助ける番だ」

コボルド達は互いを見つめて頷きあった。

奥様に食われる覚悟を決めたのだ。

かの家で奉仕するコボルド達は、決して、言うてはいけなさとされる言葉を、まず最初に習う。即ち……

「ケチー！」

「ブスー！」

「下腹ぽっこりー！」

「大年増ー！」

コボルド達は、やいのやいのとオーシルシークスの悪口を並べた。僅かでもこちらに注意を引くことが出来れば、長達が食われることもない。

コボルド達の悪口を聞いた、オージルシークスはきつと、彼等を見つめ、苦痛に喘ぎながら再び空へと舞った。

長を救うことに成功した彼等は歓声をあげ、ディック達の元に駆け寄った。

一連の様子を見ていたサッド達も合流し、彼等は村へと帰還した。

そこで一悶着はあったものの、貴重な情報と戦力になることをサッドが口八丁でシグモンドを説き伏せ、コボルド達も村に入れることになった。

+

「サイト、何度でも言うが、セリマスのおっぱいは俺のだ。……後は言わなくても分かるな?」

「私のだって言うてるでしょバカ!」

セリマスの重戦棍をひょいっと軽く避け、なおもジーツは言い募った。

「抱きしめられたからって『俺愛されちゃってる!』なんて勘違いするなよ」

「わかったつてば、しつkeerよ!」

才人は、自分が声をあげて、泣いてしまった事に赤面して、ジー

ツに大声をだした。

才人達は、激しい戦闘が終了した後、互いの無事を喜びあった。特にタルブロンは命を手透けてもらった礼に、地球帰還は成否に関わらずタダにしてもいいと申し出た。この義理堅いウォーフオージドの申し出に、どのように金策するべきか頭を悩ましていた才人は素直に喜んだ。

ジーツは、セリマスが才人を抱きしめたのが気に入らないらしく、かといって、相棒の命を助けてもらっただけに実力行使をするわけにもいかず、ネチネチと才人を言葉で締め上げた。

ウルビアンは単純に、助かって良かったなと声をかけただけだった。

セリマスは才人が落ち着いたとみるや、気を引き締めていきましよう、支援魔法をかけ始め、タルブロンも其れに同調して、呪文を唱えた。

そう、まだやるべき事が残っている。

まずは、逃げ出した商人達だったが、これはすぐに結果がわかってしまった。才人がタルブロン達の所へ向かったのは正解だったのだ。床におびただしい血痕が残されていて、その量からして、彼等が無事であることはまず、ありえないとウルビアンが断定した。

その断定に、才人は気が重くなってしまったが、ジーツは、言った。

「お前が来なけりや相棒は死んでたんだ。お前は自分の命と相棒を救ったんだ。胸を張れ」

「……そうね。自分ともう一人ぐらいしか、普通は助けられないわ。全員無事なんてそれこそ奇跡よ」

長い間、戦い続けた年長者の意見は、ずっと才人の胸に染み込んだ。

才人達の探索は続いた。ウルビアンが足跡を発見し、それは才人が漂着した海岸まで続いていた。が、そこで途切れた。

「ここで襲われたか、泳いで村に帰ったかだな」

「十中八九生きちゃいねえよ」

「かもな。君たちも戦い通しで派手に呪文を使って疲れているだろう？ 宿があるなら連れて行って欲しいのだが」

「エルフに賛成だ。サイトにもらった酒を飲みてえ」

……道中、海神を称える祭壇を見つけた。祭壇はサメの口を思わせる半球状の建物だ。その内部は鋭く尖った歯が剣山のようにびっしりと並んでいて、海神ディヴァウラーへ捧げる供物が内部には収められている。そこには、おそらくは、先ほどの巫女の者と思われる宝箱チェストがあり、一振りの小剣と幾許かの宝石が入っていた。

「サイト、お前にやるよ」

「え、でも」

「エラ娘をぶつ殺したのはお前だからな。俺らは自前の得物があるし、宝石がいい」

才人は少し考えて、金をくれと言った。

「剣もらっても宿屋で止まれないよ。俺、こっちのお金持ってないんだ」

こっちの？ その会話を聞いたウルビアンはサイトの発言に疑問を抱いたが、表面上は気づかなかった振りをした。

「心配するな。2、3日分くらいなら払ってやるよ。得物もつとけないと困るぞ。何かあるかわからないからな」

「マジで？ じゃあもらっておく」

才人が鞘から小剣を抜くと、ぼわつと炎が吹き出した。魔法が付与された小剣だった。鞘に戻すと火が消える。抜き差しして、火がついたり消えたりするのを見て才人は歓声をあげた。

「なにこれ、すげええ！」

「あ、サイト、やっぱ、今のなし」

「イヤだね！ これ俺のдаро？ セリマスさんそうでしょ？」

「……ジーツ意地汚いわよ」

前言をあつさり翻したジーツに、セリマスは呆れ顔で注意した。

ぐぬぬとジーツは呻いて、もってけ泥棒と吐き捨てた。

その後、祭壇は完膚なきまでに破壊され、再利用できない様に、油を巻いて、火をかけた。

洞窟を抜けると、どこかの倉庫につながっていた。ここが、かつて海賊が根城にしていた倉庫なのだろう。倉庫の扉を開けると、暖

かい風が流れこんできた。温暖な春の陽気といつていい風だった。不思議そうな顔をする才人に、「結界を張っているから暖かいんだ」と、タルブロンが教えてくれた。

倉庫を出ると、目の前には、宿屋があつた。宿屋の看板は、木樽の蓋のような円形で、魔法で動かしているのか、ぐるぐるとゆつくりまわっていた。ビールが注がれたマグカップは、泡が高々と波打っている……それが波高亭の看板だった。

その浪高亭に、見覚えのあるピンク髪の女の子を背負った小人が入ろうとしているのを才人は見つけた。

「ルイズ！」

その小人に駆け寄ると（彼女はドワーフ族の神官でフラワーと名乗った）「あんた、誰？」と、彼女の鋭い誰何の声に、才人はしどろもどろになってしまった。

「おい、フラワー、そいつその子の従者だから心配ないぞー」

どうやら、彼女はジーツの知り合いだったらしく、彼の助け舟で事無きを得た。

ジーツ、タルブロン、セリマス、フラワーの有力冒険者の連名で、才人とルイズの滞在は許された。コボルド達は暑くて死ぬと騒ぎ出したので、地下のワインカーブに案内された。コボルド達が悪さをしないように嚴重に封をしているものの、どこまで功を奏するかは未知数だった。

シグモンドの妻、イングリッドが部屋を案内し、ルイズが目覚めますまで、彼女の娘、カヤが看病するという。才人は、代わりの下着やローブをもらい、隣の部屋で着替えると、ベッドに潜り込んだ。頭から毛布をかぶると、疲れきっていた体は、睡眠を欲していたのだろう、その精神は、あつという間にダル・クォールへと誘われた。

夢の領域

ルイズと才人の長い一日がようやく終わりを告げた。

同時刻、階下にて

ウルビアンは、シグモンドに部屋を頼んでいた

「店主、部屋はあいてるかな？」

「開いてるよ。どんな部屋がいい？」

「ベッドがあるなら粗末なものでも構わない。水の中よりは快適だろうからな」

その答えにガハハとシグモンドは笑って鍵をウルビアンに放り投げた。

「違うない」

シグモンドから鍵を受け取ったウルビアンは、もうひとつ頼みがあると、シグモンドに言った。

「頼みってなんだい？」

「私の部屋のランタンは消しておいてくれ」

ウルビアンの言葉に、シグモンドはぴくりと、一瞬だけ表情を動かして「注文通りにしておくよ」と答えた。

その言葉にウルビアンは満足そうに微笑んで、自室に向かったのだった。

長い一日（後書き）

クエスト The Grotto 了

断章 過去・未来・現在

十 過去

トリスティン王国宰相の執務室で、決済を待つ積み重なった書類が塔を成す中、ロマリアの新教皇マザリー二へ寿ぎの書簡を認めていた、ラ・ヴァリエール公に梟便が届いたのは、夜もだいぶ更けてからである。

書簡を先に受け取ったのは、ルイズの婚約者であり、先年、ド・ワルドの当主となったジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド卿だった。

一瞥して見て取れた差出人は学院長のオスマン老からである。

夜も更けてから届けられた書簡。

差出人は魔法学院の院長。

訝しむ要因は、十分にありすぎる。

「オスマン老から閣下宛です」と公に告げ、ワルド卿は公に書簡を差し出した。

蜜蝋の封を卓上のナイフですつと裂いて、取り出した中身に目を通した公の顔色が、赤く染まるのはさほど時間はかからなかった。

「どういうことだ!」

上に立つ者は感情を簡単に現すものではないと、常々後輩を指導をする彼が、書簡の中身に怒気を隠そうとはせず、怒りに体を震わせている。

「閣下、オスマン老からの書簡には何と？ まさかルイズの身に」

何か、と、言おうとしたワルド卿の言葉を遮って、ヴァリエール公は、オスマン老からの書簡を卓上に叩きつけた。両手で顔を覆って、疲れに満ちた声を、搾り出すように吐き出した。

「……ルイズが失踪したそうだ」

「失踪！？」

卓上の書簡を、ひつたくるように手にとったワルド卿は、視線を左右に何度も往復させ、書簡を隅々まで確かめた。

「……何て事だ。閣下、至急現場へ私が先行します」

「待て。現場を直にこの目で見ておきたい。……ここにある書類を片付ければ、1日程度は空くか？」

ワルド卿は、ざっと頭の中で計算し、「半日といったところでしようか」と答えた。

「それでいい。……まったく、バックスが抜けてから碌な事がないな」

眉間に皺を寄せ、肺の奥から溢れでた愚痴は、灰汁混じりのスープの様に濁りきっていた。

——3日後、ヴァリエール公はワルド卿を伴いトリスティン魔法学院の地を踏んだ。彼の到着より1時間も速く到着し、その来訪を待ちわびている女性がいる。

ヴァリエール公の長女、エレオノール・アルベルティヌ・ル・ブラン・ド・ラ・プロワ・ド・ラ・ヴァリエール、その人である。

「久しいな、エレオノール。息災か？」

普段なら、喜びの抱擁を交わしあう所だが、二人の顔に笑顔はなく、疲労と苦悩がにじみ出していた。

「お久しぶりです、お父様。……おちびの事が気にかかってあまり寝ていませんわ」

事実、エレオノールは目に隈ができている。

「無理もない。こちらでも仕事が忙しくてな、すぐにこちらに出向くことが出来なかった。許せ」

「いいえ、お父様は今やトリスティン王国になくてはならぬ人。致し方ありません」

家長として頭を下げる父を、エレオノールは僅かながら慰めた。

「カーリヌは？」

「カトレアの容態が思わしくなくて……側についています」

「……そうか」

「どうして……こんな事に！」

両手を顔にやり、体を震わせて、エレオノールは静かに泣き出した。ヴァリエール公は右手でエレオノールの肩を抱いて、娘が落ち着くまで、髪を撫で続けた。

「ここがおちびの部屋なのね……」

机とクローゼットとベッド。そして、おそらくは使い魔のためのものと思われる、藁の寝床。

その簡素な部屋がルイズの部屋の全てだった。

ルイズの失踪が明らかになったのは、翌日の授業に出席しなかったからだった。女性教師のシュヴルーズが、出席しなかった事を訝しみ、ルイズの部屋に訪れ、書き置きを見つけた事から発覚した。

また、オスマン老ら教師の聞き込みにより、ルイズが最後に会った人物は、平民のメイドのシエスタという娘で、彼女はルイズに頼まれて日持ちのするパンと干し肉等を夜食に欲しいと言われ、それを用意したという証言が得られた。

残された書き置きを信じるなら、彼女は召還の門を開いて、その向こう側へ行ったことになる。

ディテイクト・マジックを通して判明したのは、魔法の使えないルイズが、何らかの魔法を使ったという事のみであった。

それらが意味する所は、ルイズ自身による失踪という事実だった。

学院長オスマン老と、召還の儀式の担当教師であるコルベールは、

公達に向かいそろって頭を下げ、ルイズの失踪という監督不行き届きを詫びた。それから、ルイズの書き置きを見せ、前例のない話であるが、書き置きの通り、召還の門を逆に超えて行った可能性がある事を告げた。

「そんな事があり得るの!？」

「だれもその場を見た者はありません。ですが、彼女が部屋から出た形跡がありません。無論女子寮だけでなく、学園から出た形跡もです」

ルイズの家族へ宛てられた詫びの文言と涙の痕を見て、エレオノールは再び泣き出した。公ですら、目尻に涙をにじませ、何度も何度もルイズの手紙を読んでいる。

「おちびの馬鹿! 馬鹿おちび!」

ついにエレオノールは、人目も憚らず、声を上げて泣き出した。

エレオノールの泣き声が部屋に響く中、不意に全員の目が部屋の中央に注がれた。

この部屋に自分たち以外の魔力が注がれている!

公とワルド卿はエレオノールを守るように後ろへ下がらせ、杖を抜いた。オスマン老とコルベールはその二人を守るようにさらへ前へ進み出る。エレオノールも泣き止んで、ハンカチで涙を拭くと杖を抜いた。

注がれた魔力はヒトの形を取り、あつと言う間に消え失せた。

そこに現れたのは、粗末な身なりの娘だった。マントはいたる所が破れ、煤だらけとなり、短い髪はくしゃくしゃで、まともな身なりの者とは到底思えない。何より、数日風呂にも入ってないのだから、饅えた体臭どころか、硝煙と死臭すら漂ってくる。まるで戦場から命からがら逃げ延びたかのようなのだ。

さもあらん、彼女はまさく、地獄のような戦場を生きて帰ってきたのだった。

彼女の目には涙が滲んでいて、右の頬には治りかけの裂傷がある。

彼女は手にした魔法の品々を、決して離すものかとばかりに固く胸に抱きしめていた。

眼前に立ち、驚く人々を娘はようやく認識したのか、

「ルイズ・フランソワーズ、ただいま帰りました」

と、頭を下げ、帰還の挨拶を告げたのだった。

十 未来

夏期休暇にゼンドリックへ戻るために準備をしていたルイズに、懐かしい顔が訪ねてきた。

バーガンディ泊へ嫁いだ姉のエレオノールである。

彼女はルイズの顔を見て、それから王都の両親に会いに行くつもりなのだという。

丁度、安定期に入ったから、顔を出すなら確かに今しかない。

ルイズはトリスタニアで、ゼンドリックに向かうと、両親に別れの挨拶をすませてある。

母譲りの頑固さで、好き放題に生きているルイズの事を、両親は諦めたわけではない。何度も結婚の事を持ち出し、その都度練兵場で大喧嘩が始まるのだが、一応軽く勧めて見るだけで強くは言い出せないのだった。

ただ彼等もまた、ルイズと同様に諦め切れなかったけなのだ。

あの、優しい黒髪の少年の事を。

「久しぶり、エレオノール姉さま」

「おちびは相変わらずね。今年の夏もゼンドリックに行くの？」

「もちろんよ。シャーンのほうにも顔を出すけど」

「シャーンはともかく、ストームリーチはこりこりよ。あんな恐ろしい所……」

ルイズの案内で行った婚前前の家族旅行は、まさしく珍道中となつたのは記憶に新しい。

ストームリーチの港湾地区で、コボルド達の熱い歓迎に戸惑い、フィアラン氏族のエンターティメントの過激さに目を回し、ジヨラ

スコ氏族のエステで顔を蕩けさせ、十二会の秘術施設にひっくり返った。

五つ国の法が通用しない地区なので、ストームリーチは刺激が満点だ。スリに狙われること数十回、ルイズに壊滅させられた盗賊団から、報復の暗殺者が送られること5回という散々な旅であった。

あまりにデンジャラス過ぎたので、シャーンに跳んだ所、あまり治安の良さに、エレオノールが泣いて感激したほどである。

「慣れればそれ程でもないのよ？」

「慣れるつもりはありません！」

それから二人は、メイドが食事の用意ができたと知らせに来るまで、今までのこと、これからの事を、存分に語り続けた。

「……姉さま、もし、女の子が生まれたら、なんて名前をつけるつもりなのですか？」

エレオノールは自分のお腹に手をやって微笑んだ。

「カトレアってつけるつもりよ。きっと母様も賛成してくださるはず」

「きっと、ちい姉さまも喜んでくださるわ……」

夜半もすぎて、火の入っていないランタンを手に持ったシグモンドは、目的の部屋を訪れた。

コンコンと、ドアを叩いて「宿屋の者だが、火はあるかね？」と扉越しに問うた。返ってきた答えは当然ながら「ランタンの火は消しておいてくれ」というものだった。

ドアを開け、ジグモンドが部屋に入ると、ウルビアンは鎧を脱ぐことなく、ベッドの傍らにある粗末な木製の椅子に座って、シグモンドの来訪を待っていた。

部屋には明かり一つ無い。

シグモンドもウルビアンも、元来の職業柄ゆえに夜目がきくので、明かりがなくとも、さほど困らない。

「あー、自己紹介がいるかい？」

どこか、困惑した表情で軽口を叩くシグモンドに、ウルビアンはむっつりとした表情で答えた。

「いらん。報告のみ聞こう」

その答えにシグモンドはため息をついた。

このエルフがこういう性格なのか、それとも、^{ダーク・ラン}ブレランド王室情報部^{タン}がこうなのか。

通常エルフといえば、フィアラン氏族か、大戦中にフィアラン氏

族から分裂したチュラーニ氏族、エアレナル諸島、エアレナルから進出しコーヴェア大陸南東部に建国されたヴァラナーのどれかに所属するものだとしグモンドは思っていた。

だがこのエルフ青年は違う。ブレランド王国に忠誠を誓っている。ボラネル王の名のもとに正義を執行する巨大組織キングス・シターデルの情報部門に属しているのだ。

このエルフ青年がブレランド王室へ忠誠を抱くに至った物語を、いつか聞いてみたいものだ……。

シグモンドはこの3ヶ月の顛末を語り、ウルビアンウルビアンの質問を答えることで、何故彼が派遣されたかを深く理解した。

最終戦争が終わって、数年が経ち、コーヴェア大陸の五つ国は今、復興景気に沸いている。

南方大陸であるゼンドリックから産出される竜水晶ドラゴン・シャードや、かつてゼンドリックを支配した巨人族のお宝を求めて冒険者が絶えず乗り込み、一山当てた連中が、お宝を持ち帰るなり、お宝を換金して派手に使うことで、景気はさらに加速している。

その好景気のおこぼれに与ろうと、戦争中はなりを潜めていた海賊たちがサンダー海へ戻ってきた。

コーヴェアとゼンドリックを結ぶスマグラレスト航路は、海賊たちが溢れ（その中で飛び抜けて暴れていたのが血潮団である）、代替としてコルソス航路を使うことになった。

ところがそのコルソス航路さえも白竜の襲撃で潰されようとしている。

新しい航路はそう簡単に見つからない。

せつかくの好景気を潰されては国が立ち行かなくなってしまう。

ダーク・ランタンが動くのも無理はなかった。

ウルビアンは血潮団に関する情報を集め、それを対処するべくゼンドリックの植民都市ストームリーチに向かう途中で白竜に襲われたのだった。全ての船が沈んでいるために、コーヴェアには詳しい情報がほとんど行っていないとはずだと、報告を全て聴き終えたウルビアンは、表情を変えることなく語った。

「こちらからも情報がある。悪い報告と悪い報告だ。どっちを聞きたい？」

そのセリフにシグモンドは絶句した。

それは彼なりのジョークなのか？

「……普通、そこは良い報告と悪い報告の2つじゃねえんですかい？」

「良い報告なんてものは情報部には存在しない。たいていは憶測と希望の混じった誤報だ」

疲れた表情に嫌悪感を浮かべて、ウルビアンは吐き捨てた。

「シグモンド、シヴィス氏族の龍紋所持者に救助の伝言を頼んだと言ったな？」

「ああ」

シヴィス氏族は刻印の龍紋を持つ一族で、スピーキング・ストーンと呼ばれる魔法の石を使い世界中の情報伝達を担っている一族だ。

「相手は誰だ？」

スリー・バレル・コーヴ

「三樽江島のラツカム」

コルソスから約450マイル（720キロ）程西へ行ったところにある三樽江島は海賊たちの根拠地とっていい。嵐の龍紋を持ち、天候を操れるがゆえに海運業を担っているリランダー氏族とは敵対したり、護衛したりと、その関係が海の天候のように、その時々によつて忙しく変わる。

ラツカム・トライアル

「海賊養成所のか？」

「奴に貸しがあるからだが……まさか」

シグモンドの顔が一気に蒼白になった。だが、ウルビアンは即座に彼の懸念を否定した。

「そこが落ちたという情報はない。陥落したのはブラッククロツホ砦だ。血潮団の連中にな。それだけじゃないぞ、血潮団の根城であるミストラル島要塞攻略だが失敗した。ハウス・デニスの連中は全滅、ハウス・オリエンの連中だけが命からがらストームリーチに逃げ込んだそうだ」

その話を聞いてシグモンドは、話の不可解さに顔をしかめた。

最終戦争では多くの人材が死んだために、このご時世、腕利きと呼ばれるような人材は貴重だ。ハウス・デニスの軍を追っ払えるほどの人材の集まりなどいっただうやって集めたのか？

「……そんなに強いだなんて、そこいらのチンピラじゃねえな。どこかの国の兵隊崩れ？　あるいは正規兵を使った私掠船か？」

「いや、血潮団の構成員はドラウの弓兵と秘術師、ホブゴブリンにコボルド、オークのクレリック、それから知性を持った死人共らしい」

「……なんだその組み合わせ？　そんな連中聞いたこともねえ」

シグモンドは組み合わせの珍妙さに驚いた。まともな人族がほとんどいないではないか。

「推測だが、ほとんどはゼンドリックからの現地調達。死人共はカルナスからの落人だろう。今や北方は銀炎教がそれこそ、破竹の勢いだからな。……血潮団関連はおそらくハウス・タラシユクが絡んでいる」

ウルビアンは、推測の中身をより詳しく述べた。

ゼンドリック大陸の植民都市ストームリーチは、元は海賊たちが作り上げた街であり、ストームリーチを開拓した海賊たちの子孫達ドラゴンマーク・ハウスがコイン・ロードとして街を統治している。そして、各龍紋氏族達はコインロード達に許可を得て、居留地を借りることで、権勢を広げている。

だが、ハウス・タラシユクはストームリーチに居留地を得ていない。

その理由として、傭兵業がハウス・デニスと重なっている事と、人間で構成されているハウス・デニスが種族差別的なロビー活動をストームリーチで行っているからだ。

ハウス・タラシユクはハーフ・オークを主とする一族である。

ゼンドリックに住まうオークの諸部族達から積荷を奪われてきた商人たちには、そのロビー活動はさぞ効果的だったことだろう。しかしタラシユクは、ハーフオークであるが故に、ただの人間よりもゼンドリックに住まう人型生物の諸部族には話が通りやすいという利点も存在する。

それら部族を訪ね、積荷を襲わないよう金品で交渉することもできるし、部族の戦士を現地採用し、傭兵業としてハウス・デニスよりも使える人材が揃っていると、私掠船戦術という実益を兼ねたデモンストレーションを行っているのではないか？

それがウルビアンの推測であつた。

「お前の所にもタラシユクとチュラーニの若造共が来てるだろう？」

「あ、ああ……たしかタラシユクが積荷をチュラーニの船長に頼んだって話だったな」

「奴らから決して目を離すな。奴らに関する情報は全て私の所に持つて来い」

「いや、それはいいけどよ。こっちの問題はどうするんだよ？」

不満気にシグモンドは問うた。スマグラールレスト航路より、目の前の問題がより切実である。

「ジーツとか言ったか？ あいつくらい腕ならなんとかなりそ

うだな」

「人任せかよ……」

不満気に顔を歪めるシグモンドに、エルフの青年は鋭い視線を向けた。

「不満か？」

「不満だね。こちらら命がかかってら。俺だけじゃなく、家族、村人、客も含めてな」

「言っておくがな、小僧。前につるんでたお友達と一緒に、宿泊客から情報を聞きだして、船ごと頂いていた事はすでに調べてある。中にはブレランド王室に少なからぬ損害も与えていた事例もあった。それを見逃してやっているのは何故か、もう、言わなくてもわかるな？」

ウルビアンの指摘に、シグモンドは、うつ、と二の句を嚙まざるを得なかった。

妻のイングリットと出会い、子供ができてからは、堅気になろうと誓い、それからまっとうに生きていても、過去は消すことはできないのだ。

改めて、そう思わせられた。

「お前に利用価値がある間は見逃してやる。過去に出した損害分、王室に奉仕しろ」

「……わかったよ」

シグモンドが部屋から退出すると、ウルビアンはいつもの作業に

とりかかった。

ベッド上に人が寝ているように毛布で上手に偽装し、部屋の隅にあるクローゼットを前に引き出して、自分が壁に寄りかかれるだけの空間を創りだし、棍棒を抱いて、精神を解き放った。

エルフに睡眠は必要ない。だが脳と体を休め、心と体の調子を整える作業には数時間を要する。

自分に与えられた任務と、その遂行にあたって、かつてない障害が目の前にそびえ立っている。

だがそれは、彼にとって『いつもの事』なのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7605r/>

DLO

2011年11月13日13時31分発行